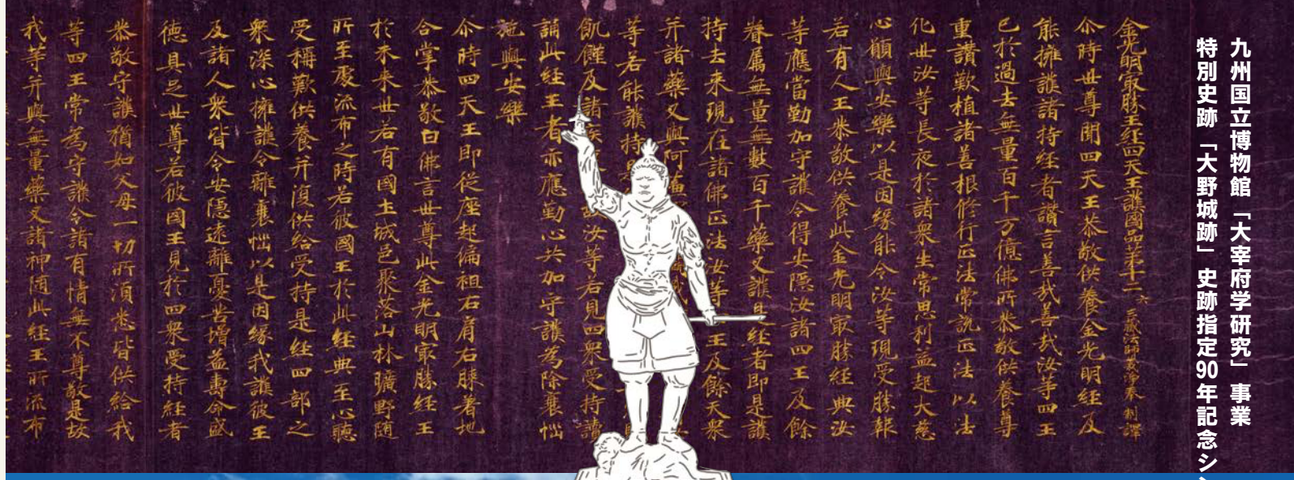
九州国立博物館「大宰府学研究」事業
特別史跡「大野城跡」史跡指定90年記念シンポジウム　資料集



大宰府四王院

「西の都」に築かれた鎮護国家思想の寺

日時　令和4年(2022)9月3日(土)
13:00～16:45（12:30受付開始）

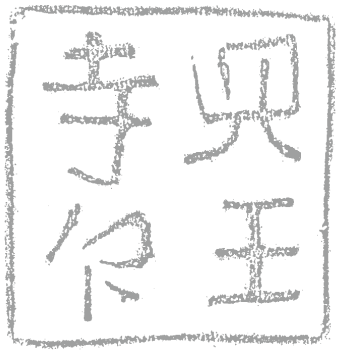
会場　九州国立博物館
1階 ミュージアムホール

KYUSHU NATIONAL MUSEUM
九州国立博物館
［太宰府天満宮横］

主催／九州国立博物館、福岡県

（写真上）【国宝】紫紙金字金光明最勝王経（巻第六・四天王護国品（国分寺経））（奈良国立博物館所蔵・写真提供　佐々木香輔氏撮影）（写真下）伝四王寺山出土　銅製経筒（九州国立博物館所蔵）
（印影）【重文】銅印「四王寺印」（原品は京都国立博物館所蔵）

KYUSHU NATIONAL MUSEUM
九州国立博物館



ごあいさつ

本日は､九州国立博物館「大宰府学研究」事業シンポジウム『大宰府四王院 「西の都」に築かれた鎮護国家思想の寺』にご参加いただき、まことにありがとうございます。

当館の所在する太宰府市には、古代西海道を統括する地方最大の官衙(かんが)・大宰府が置かれていました。その大宰府政庁の背後にそびえる四王寺山（大城山）には、古代山城として名高い特別史跡「大野城跡」があり、大宰府を軍事的に防衛していました。その実態については、福岡県及び九州歴史資料館、太宰府市、宇美町、大野城市による長年の調査によって、古代山城としての構造など、その一端が明らかとなっています。

また、大野城跡は奈良・平安時代以降、徐々に軍事的色彩が薄まる一方で、それにとって代わるように鎮護国家思想によって四王院(四天王寺)が創建されます。さらにその後も四王寺山には、原山無量寺などの寺院、岩屋城などの中世山城などが置かれ、中世に至っても大宰府の中で、その重要な位置づけは変わりませんでした。

九州国立博物館では大宰府学研究事業として、これまで古代山城・大野城跡に焦点を当てたシンポジウムや研究発表を行ってきました。さらに今後は、古代以降の大宰府の展開を見据え、四王寺山に所在した四王院や岩屋城など、古代・中世の寺院や城郭も取り上げていくこととしたいと考えております。

本シンポジウムでは、大野城跡が昭和７年（1932）に国の史跡に指定されてから90年を記念し、古代山城として機能していた時に創建され、大宰府のみならず日本列島規模においても重要な役割を担っていた四王院について、その解明に光を当てます。

アジアの多様な人、もの、文化が行き交う国際交流都市・大宰府は、我が国防衛の最前線でもあり、人々の祈りの場でもありました。本シンポジウムを通じて、いにしえの「西の都」大宰府の姿に思いを馳せていただければ幸いです。

令和４年９月３日

九州国立博物館副館長
福岡県立アジア文化交流センター所長
山田　信吾

基調講演

日本古代の境界意識と四天王信仰

三上　喜孝
（みかみ　よしたか）
国立歴史民俗博物館教授

〈プロフィール〉
1969年東京生まれ、1992年東京大学文学部卒業、1998年同大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士（文学）、山形県立米沢女子短期大学講師、山形大学准教授を経て、現在、国立歴史民俗博物館教授、専門は日本古代史。
業績:『日本古代の貨幣と社会』（吉川弘文館、2005年）、『Jr.日本の歴史（2）　都と地方のくらし　奈良時代から平安時代』（共著、小学館、2010年）『日本古代の文字と地方社会』（吉川弘文館、2013年）、『落書きに歴史をよむ』（吉川弘文館、2014年）、『天皇はなぜ紙幣に描かれないのか』（小学館、2018年）

はじめに

筆者はこれまで、８世紀後半から９世紀にかけての境界意識と四天王信仰との関係について考察を進めてきた（三上喜孝2004、2005、2015など）。８世紀後半に、新羅との関係を意識して大宰府・大野城に四天王寺が建立され、おそらくそれとほぼ同時期に秋田城に四天王寺が造られると思われるが、９世紀以降、四天王信仰は日本海側諸国に広まっていくことが文献史料上で確認できる。これは、９世紀以降になってあらわれる「閉じた空間」としての国土意識の醸成と、強烈な排外意識が背景にあると考えられる。本講演では、筆者がこれまで述べてきたことをふまえ、秋田城四天王寺の検討を出発点に、９世紀の日本海側諸国における四天王寺建立とその背景について考察することにしたい。

1 秋田城四天王寺の成立

まず、出羽国の秋田城にも置かれていた四天王寺についてみていきたい。『類聚国史』天長７年（830）正月癸卯（きぼう）条によれば、この年に大地震が起こり、秋田城が倒壊し、死者15人、負傷者100人余りが出た。その際に、城内の「四天王寺」と「四天王堂舎」が倒壊したという。これは、秋田城内に四天王寺、四天王堂舎が置かれていたことを示す初見記事である。

ここにみえる「四天王寺」には、本尊の丈六仏が安置されたと記事にみえるが、「四王堂舎」の実態はわからず、東西南北の要所にそれぞれ堂舎を設け、一堂に一王を安置する形をとったのではないかとする説がある。

秋田城の四天王寺に関わる史料として、10世紀初頭に成立した法制史料である『延喜式』（主税上）の項に、「四天王修法僧供養并法服料」として2680束の予算が計上されている。隣国の陸奥国にはみられないことから、出羽国ではとくに四天王法が重視されていたことがうかがえる。

では、秋田城の四天王寺は、いつごろ建立されたのであろうか。少なくとも天長７年（830）に存在していたことは確実である。文献史料からはこれ以上のことはわからないが、秋田城跡のこれまでの発掘調査成果によれば（秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所2008）、秋田城外郭東門外側に広がる「鵜ノ木地区」に、周囲に区画施設をともなう四面廂堂風建物の存在が確認され、さらに「寺」「□玉寺」と書かれた土器や、仏教関係遺物なども出土していることから、ここが、文献史料にみえる四天王寺であったと考えられている。とくに「□玉寺」は、「四王寺」と書いてあった可能性が高い。

遺構の年代は、秋田城の年代観ではⅢ期（８世紀末・９世紀初～９世紀第Ⅱ四半期）とⅣ期（９世紀第Ⅱ四半期～９世紀第三四半期）と考えられている。このことから、８世紀末から９世紀初めにかけて、秋田城の東側に、四天王寺の伽藍（がらん）が整備されたと考えられる。おりしも宝亀11年（780）、蝦夷との間でいわゆる「三十八年戦争」が勃発しており、東北政策においても大きな転換点となったのが宝亀年間であった。

秋田城における四天王寺の創建を宝亀年間と考える理由は、もう一つ存在する。それは、西海道の大宰府四天王寺の創建が、宝亀５年（774）であることによる。北と南の四天王寺は、対外的な脅威が背景となり、国家的な政策として、北と南の辺要の地に置かれたと考えられるのだが、そのことを次に述べる。

2 大宰府四天王寺の建立とその背景～

古代の辺要国と四天王法との関わりでよく知られているのが、西海道の大宰府・大野城である。『類聚三代格』宝亀５年（774）３月３日官符には、その創建について詳細な経緯が述べられている。

> 太政官符す
> 応に四天王寺埒像四躯を造り奉るべきこと〈各高さ六尺〉
> （中略）聞くならく、新羅の兇醜、恩義を顧みず、早く毒心を懐き常に咒咀を為し、仏神誣し難く、慮或いは報応す。宜しく大宰府をして新羅に直する高顕の浄地に件の像を造り奉り、その災いを攘却せしむべし。よりて浄行僧四口を請い、おのおの像の前に当たり、一事以上最勝王経四天王護国品に依りて、日は経王を読み、夜は神咒を誦せ。但し春秋二時一七日ごとに、いよいよ益々精進し法に依りて修行せよ。よりて監已上一人その事を専当せよ。（中略）供養の布施は並びに庫物および正税を用いよ。自今以後、永く恒例と為せ。

以上の内容を簡単にまとめると、以下の通りである。

- 新羅が毒心を懐き、常に呪詛（じゅそ）を行っている。
- そのため、大宰府に命じて、新羅に相対する高顕の浄地に四天王像を作る。
- 僧四人が、四天王の各像の前で最勝王経四天王護国品によって、昼は経巻を読み、夜は神咒を誦すこと、春秋の四天王修法を行うべきこと、供養の布施は大宰府の庫物ならびに正税を用いること、などを定める。

後述するように、９世紀後半以降、新羅との対外的緊張を背景に、日本海側の諸国で四天王法が行われるようになるが、その端緒となったのが、この宝亀５年の大宰府四天王寺の建立であった。この年、新羅使が大宰府に来着した際の外交姿勢をめぐって激しく対立し、新羅使を「放還」するという事態が起こったほか、新羅からの来着者に対して、「流来」「帰化」の処置を明確に区別し、そのうえで「流来」者については送還を義務づけるなど、新羅人に対する強硬な態度がとられたのである。

大宰府四天王寺に関するその後の記事をみてみると、801年に四天王寺はいったん大野城から筑前国分寺に移されるが（『類聚国史』巻180　延暦20年（801）正月癸丑条）、その後疫病が甚だしくなったので、807年にもとの場所に戻したという（『類聚国史』大同２年（807）12月朔条）。四天王寺における法会が、しだいに疫病とのかかわりで重視されているという点は注目される。

さらに９世紀後半になると、新羅への脅威という言説が再びあらわれる。

> 神祇官奏言すらく、肥後国阿蘇大神、怒気を懐蔵す。これにより、疫癘を発し隣境の兵を憂う

べし。勅すらく、国司は潔齋し、至誠奉幣し、あわせて金剛般若経千巻、般若心経万巻を転読し、大宰府司は城山四王院において、金剛般若経三千巻、般若心経三万巻を転読し、以て神心に謝し奉り、兵疫を消伏せよ（『日本三代実録』貞観８年（866）２月14日条）

「疫癘を発し隣境の兵を憂うべし」とあるように、新羅への軍事的脅威と疫病がセットになって語られるようになる。これと連動して、四天王法は山陰道諸国に広まっていくことになる。

3 ９世紀後半における四天王法のひろがり ～山陰道諸国の四天王法～

貞観９年（867）には、八幡の四天王像五鋪を造り、各一鋪を伯耆、出雲、石見、隠岐、長門等の国に下すという命令が出されている（『日本三代実録』貞観９年（867）５月26日条）。そもそもこれらの国の地は「西極」にあり、堺は新羅と接するため、他国に増して警護の必要があるというのである。そこで「地勢の高敞にして、賊境を瞰瞰する」場所を道場に選び、四天王法を行い、「賊心」を「調伏」し、「災変」を「消却」すべきだとしている。その方法は、尊像を安置し、国分寺及び部内の練行精進僧四口を請い、各像の前に、最勝王経四天王護国品にもとづき、昼は経巻を転じ、夜は神咒を誦し、春秋二時ごとに一七日、清浄堅固にして、法によりて薫修すべきことを定めている。その方法は、基本的には大野城における「四天王法」と同様である。

元慶２年（878）には、蓍亀により辺要国の警固の必要性が告げられたため、因幡、伯耆、出雲、隠岐、長門等の日本海側の諸国に命じて、四天王像の前において新羅調伏の法を行わせたという（『日本三代実録』元慶２年（878）６月23日条）。

９世紀後半の貞観年間には、対新羅認識が悪化した（山崎雅稔2001、大日方克己2022）ことを背景に、山陰・山陽道諸国の四天王寺建立などが急がれたものと思われる。

4 「四王寺印」をめぐって

話を秋田城四天王寺に戻そう。秋田城四天王寺を考える上で、見逃すことのできないものが、現在京都国立博物館が所蔵している銅印「四王寺印」である。この「四王寺印」は、江戸時代の寛文年間以後に京都の聖護院末の積善院に伝来したものである（難波田徹1981）。

この四王寺印はもと秋田県の四王寺に伝えられていたという。この四王寺印が積善院に移った経緯は、古四王神社の神宮寺が聖護院末（積善院は聖護院の塔頭）であることによると考えられている。

この四王寺印自体は、印面の大きさが奈良時代の「東大寺印」とほぼ同じであることや、鈕の形態が、弧鈕から次の段階であらわれる莟鈕へと移行する中間段階のような形であることから、平安時代の初めから前期頃のものと推定される（田路正幸1999）。

この印章に付属して江戸時代の文書がいくつか伝えられているが、それによると、江戸時代、京都の積善院で、毎年正月元旦から約２週間、秋田祭という行事が行われていたことがわかる（この秋田祭は1960年頃まで行われていたらしい）。秋田祭は、印鑰祭とも呼ばれ、かつては秋田城の四天王寺でその印鑰祭が行われていたとする説もある（土橋誠2001、2011）。

四王寺印の付属文書である『秋田祭作法』に、「智証大師伝青龍寺之印鑰、納園城寺之勝地、聖徳太子持百済国之印鑰、崇秋田城之霊寺」とあり、聖徳太子が百済の印鑰を秋田城の霊寺に納めたとする伝承を載せている。もちろんこれは史実ではなく、後の聖徳太子信仰との関わりから生まれたものであろう。

ただ、この伝承自体は、鎌倉時代までさかのぼると考えられる。鎌倉時代の顕真自筆本『法隆寺古今目録抄』（1239年頃成立）下巻の「四十六箇寺院」の最後に「四天王寺」が見え、その注に

出羽国秋田城在之。御印半令置給、残半者津国天王寺在之。

とみえる。これによると少なくとも鎌倉時代の時点では、秋田城に存在した四王寺印が、聖徳太子信仰と結びついていたと考えられる。なお、「御印半令置給、残半者津国天王寺在之」については解釈が難しいが、ここでは秋田城四天王寺と摂津国四天王寺が結びつけられている点を重視したい（荻野三七彦1966）。

もともと摂津国の四天王寺は、聖徳太子が建立した寺院として知られているため、秋田城の四天王寺も聖徳太子との関係が意識されるようになったのだろう。これに関連して興味深いのは、『四天王寺縁起』にみえる、次の記事である。

百済・高麗・任那・新羅、貪狼の情、つねに強盛なるをもって、彼等の州を摂伏して、帰伏せしめんがため、護世四天王像を造り、西方に向け置く。また代代世世の王位固く守護せしめん。

『四天王寺縁起』は、聖徳太子に仮託して寛弘４年（1007）に作成された書であると考えられている（榊原史子2013）。興味深いのは、「百済・高麗・任那・新羅」を帰伏させるために、四天王像を造り、それを西方に向け置いたと、『日本書紀』にはない記述がみえることである。むしろこれは、新羅と接する日本海側諸国で、四天王法が行われるようになった９世紀半ば以降になって生まれた言説なのではないだろうか。

秋田城の四天王寺は、敵国調伏としての四天王信仰の広まりの契機となった寺院として平安時代以降も記憶され、さらにそれが聖徳太子信仰と結びついて、江戸時代の四王寺印と「秋田祭」（印鑰祭）の継承へとつながったと考えられる。なお、17世紀初頭に作られたと推定される『古四王社縁起』（秋田市1996）も、秋田城四天王寺を「聖徳太子之草創」としている。

5 国土鎮護と観世音寺

北と南の辺要国では、観世音寺（観音寺）が置かれたことも見逃すことができない。辺境における観音寺でまず想起されるのが、大宰府観世音寺である。大宰府政庁の東方約600メートルに所在する観世音寺は、もとはこの地で没した斉明天皇の追善供養のために天智天皇が発願したものだが、天平18年（746）に至り完成し、大宰府付属寺院として辺境支配の拠点となった。

一方、陸奥国に目を転じてみると、多賀城政庁跡の東側にやはり観世音寺式の伽藍配置を持つ多賀城廃寺があり、多賀城の付属寺院であったと考えられる。宮城県多賀城市の山王遺跡からは、「観音寺」と書かれた墨書土器が出土しており、「観音寺」は、多賀城付属寺院である多賀城廃寺の呼称である可能性が高い（平川南2000）。多賀城廃寺が独特とされる観世音寺式の伽藍配置を持つことを考えると、大宰府観世音寺に対して多賀城付属寺院の寺名が同じ「観世音寺（観音寺）」となることは、十分に可能性がある。

さらに、出羽国にも観音寺が置かれていたことが史料上にみえる。『日本三代実録』貞観７年（865）５月８日条には、「出羽国観音寺を以てこれを定額に預らしむ」とある。

出羽国の観音寺については、平安時代の出羽国府が置かれた城輪柵跡の東に当たる山形県酒田市（旧八幡町）の観音寺という地区がその擬定地とされる。いずれにせよ出羽国においても、陸奥や大宰府と同様に付属寺院として観音寺が併設された可能性が高い。

近年の考古学的研究では、いわゆる観世音寺式の伽藍配置（塔と東面する金堂が向かい合う、一塔一金堂型式の伽藍配置）が、辺要国の寺院にみられるという特徴が指摘され、これらの伽藍配置を持つ寺院が、国土を外敵から仏法によって守護するための装置として機能していたとする見解もある（貞清世里・高倉洋彰2010）。

とくに注目されるのは、秋田城付属Ⅰ・Ⅱ期の寺院が、観世音寺式の伽藍配置をとっている可能性があることである（秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所2008）。とすれば、四天王寺の前身の寺院は、筑紫観世音寺と対応する寺院として創建された可能性も考えられよう。もっといえば、秋田城付属寺院は、観音寺から四天王寺へ、寺院の性格が複合的に変化した可能性も考えられよう。

観音信仰は戦乱ともかかわりが深い。天平12年

(740) に、大宰府の藤原広嗣が反乱を起こしたさいに、観世音菩薩の造立や観世音経の書写を全国に命じた勅が出されている（『続日本紀』天平12年９月己亥条）。

また、平安時代初期に編纂（へんさん）された仏教説話集である『日本霊異記』下巻第七には、武蔵国多磨郡の大真山継という人物が武官となって蝦夷征討に赴く間、彼の妻は、夫が賊難から逃れられるように観音の木像を作り、一心に仏を敬い、供養したため、夫は災難もなく、奥羽の地より帰り、仏の加護を喜んで、妻と一緒にこの観音像を供養した、という説話を伝えている。蝦夷征討に際しても、観音菩薩は征討の無事を祈る仏としてその信仰が広まっていたと考えられる。

大規模な戦乱と隣り合わせの陸奥・出羽・西海道諸国など辺要国においては、国土安寧を目的とする観音信仰がとりわけ重視されたと考えられる。律令国家は、同一の伽藍配置を持つ観音寺を辺要国に配置することで、国家的政策として仏法による国土鎮護を企図したのである。

秋田城付属寺院が、観音寺から四天王寺に変わったのではないかという可能性について興味深い史料が、「諸社寺勧進状写」（神奈川県立金沢文庫蔵）（西岡芳文2004）である。これによると、秋田四天王寺には聖徳太子が百済からもたらした「救世観音」が本尊として祀られていたが、鎌倉時代後期に「秋田城介」を世襲していた安達氏により鎌倉に移され、安達氏の邸宅に隣接する無量寿院と並んで観世音寺が建てられたという（西岡芳文2005）。

秋田城四天王寺の本尊が聖徳太子により百済からもたらされた救世観音であるという言い伝えは、むろん荒唐無稽である。この「諸社寺勧進状写」の原本は1293年頃に成立したと推定されているが、先にみた『法隆寺古今目録抄』と合わせて、秋田城四天王寺と聖徳太子信仰が鎌倉時代の時点で広く受容されていたことを示す事例である。

ただ、秋田城四天王寺の本尊である「丈六像」が観音像であった可能性は十分に考えられる（長岡龍作2006）。「救世観音」の記述については慎重に検討しなければならないが、少なくとも東北地方では薬師如来か観音菩薩が９世紀にさかのぼる尊像として多くみられるのがその根拠となる。

このようにみてくると、やはり四天王寺と観世音寺が境界地域における国土鎮護の寺院としてセットで置かれていることは注目される。大宰府の観世音寺と四天王寺の場合、観世音寺は７世紀後半に発願されるが、四天王寺は新羅に対する脅威を背景に、８世紀末に創建された。秋田城においても、付属寺院としてまず観世音寺式配置を持つ寺院が８世紀前半に創建され、さらにその後、８世紀末に四天王寺として寺院が拡充されたとは考えられないだろうか。本尊として丈六の観音像を置き、それとは別に四天王像を配置する四天王堂を建てるという形式で、観音像と四天王像がセットで安置されたのではないだろうか。

おわりに

以上、古代の境界意識と四天王信仰の関係について、秋田城の四天王寺を出発点に述べてきた。８世紀末から９世紀にかけて、新羅の脅威を意識して日本海諸国に四天王信仰が広まっていくことが確認できる。そして四天王寺に先行して、観音寺（観世音寺）の建立が北と南で確認されることは、辺要国における国土鎮護や対敵調伏が共通した意識のもとで進められてきたことを示している。

参考文献

『秋田市史　第８巻　中世　史料編』秋田市、1996年
『秋田城跡Ⅱ　―鵜ノ木地区―』秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所、2008年
荻野三七彦「日本上代の印章」『古代学』13－２、1966年。
大日方克己「貞観期の疫病、災害、危機意識と山陰地域」『古代山陰と東アジア』同成社、2022年。
榊原史子『「四天王寺縁起」の研究　聖徳太子の縁起とその周辺』勉誠出版、2013年
貞清世里・高倉洋彰「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』30、2010年
田路正幸「考古資料としての古代銅印について」『国立歴史民俗博物館研究報告』79、1999年。
土橋誠「印章のもつ呪術的性格について」『朱雀』13，2001年。
土橋誠「積善院『秋田祭（印鑰祭）』に関する一考察」林博通先生退任記念論集刊行会編『琵琶湖と地域文化』2011年。
長岡龍作「みちのくの仏像―造形と風土」花登正宏編『東北　―その歴史と文化をさぐる』、2006年。
難波田徹「『四王寺印』と印鑰祭」『学叢』３、1981年。
西岡芳文「鎌倉周辺の勧進に関する新出資料」『金沢文庫研究』312、2004年
西岡芳文「『諸社寺勧進状写』と甘縄観世音寺・秋田城四天王寺」『説話文学研究』40、2005年
平川南「墨書土器「観音寺」―多賀城市山王遺跡―」『墨書土器の研究』吉川弘文館、2000年。
三上喜孝「古代の辺要国と四天王法」『山形大学歴史・地理・人類学論集』５，2004年
三上喜孝「「古代の辺要国と四天王法」についての補論」『山形大学歴史・地理・人類学論集』６、2005年
三上喜孝「境界世界の仏法」新川登亀男編『仏教文明と世俗秩序　国家・社会・聖地』勉誠出版、2015年
三上喜孝「古代の境界意識・対敵意識と仏教信仰　―九世紀の日本海側諸国における四天王法をめぐって―」『出雲古代史研究』25，2015年
山崎雅稔「貞観十一年新羅海賊来寇事件の諸相」『國學院大学大学院紀要―文学研究科―』32、2001年。

研究発表1

筑紫大野城と大宰府四天王寺

松川　博一
（まつかわ　ひろかず）
九州歴史資料館
学芸調査室長

〈プロフィール〉
山口大学大学院人文科学研究科地域文化専攻修士課程修了。太宰府市文化ふれあい館学芸員・九州国立博物館研究員・九州歴史資料館学芸研究班長を経て、2021年より現職。専門は日本古代史。関連論文に「大宰府軍制の特質と展開」（『九州歴史資料館研究論集』37、2012年）、「大宰府と寺社」（『都城制研究』8、2014年）、「律令制下の大宰府と古代山城」（『九州歴史資料館研究論集』43、2018年）、「大宰府と鴻臚館」（『筑紫と南島』角川選書、2022年）などがある。

はじめに

大宰府政庁跡の背後にある四王寺山には、飛鳥時代、大野城という古代山城が築かれた。『日本書紀』天智天皇４年（665）８月条には「大野および椽の二城を築かしむ」と記されている。

大野城は、７世紀後半の東アジアの緊張した国際情勢のなかで築造された。天智天皇２年、日本（倭）は友好関係にあった百済の復興のため、朝鮮半島へ援軍を送るが、白村江において唐・新羅の連合軍に大敗する。外敵来襲への危機感を抱いた天智天皇は、対外防衛の最前線である九州北部を手始めとして西日本の防衛体制を整備した。

天智天皇３年には、防人と烽（烽火台）を置き、博多湾から内陸部への侵攻に備えて水城を築造し、その翌年には大野城と基肄城を築城する。

大野城は、四王寺山を土塁で囲み、谷部に石垣を築いて水門を設け、９つ以上の城門を構えた山城であったことがわかっている。城内では、これまでの調査で少なくとも古代に関わる建物跡が８地区に54棟確認されており、多くが米などの食糧を収納する倉庫とみられる（赤司善彦2014）。

1 大宰府と大野城

(1) 存続する「筑紫城」

大野城の築造から33年後の文武天皇２年（698）、大宰府に対して大野城および基肄城・鞠智城の三城について「繕治」するように天皇の命令が下された。この「繕治」については、築城から30年以上が経過し建物等の老朽化への対応という面も想定されるが、当時の政治情勢からより明確な目的をもって修理が行われたと理解することもできる。

当時の日本は、大宝律令の編纂をはじめ、律令制支配の確立に向けて組織や体制を整えようとしていた時期に当たる。したがって、大宰府管内の諸城についても軍事的な拠点、さらには西海道支配の一翼を担う施設として整備・再編しようとする意図があったと考えられる。

高安城や茨城・常城をはじめとした朝鮮式山城の大半は、８世紀初頭までにその役割を終えて廃城となっている。『続日本紀』によれば、高安城が大宝元年（701）に、茨城と常城は養老３年（719）にそれぞれ停廃された。奈良時代以降も存続した山城は、文武天皇２年に「繕治」された大野城・基肄城・鞠智城の三城とみられる。考古学的な成果においても出土した土器や検出された建物跡の状況からもこの三城が他の古代山城と異なり９世紀まで存続していたとみられる（赤司善彦2016a）。

現在の刑法にあたる律にはこの三城を指すと考えられる「筑紫城」についての規定がある。そこには、「筑紫城」に不法侵入した際や鑰を盗んだ際の罰則が定められている。その衛禁律では、兵庫（武器庫）の垣とともに「筑紫城」や東北の城柵の土塁・石垣・柵列を越えることが最も重い罪に問われている。また、「筑紫城」の鑰を盗んだ罪は、宮殿門や各種倉庫の鑰を盗んだのと同罪である。律令制下において、「筑紫城」、つまり大宰府管内の大野城・基肄城・鞠智城の三城が東北の城柵とともに、最も重要な警衛区域として位置づけられていたことがわかる。

(2) 大野城の管理

大野城をはじめとした「筑紫城」が軍事拠点としての機能を果たすためには、それを守衛・維持していくための兵員が必要となる。山城の管理については、職員令の国司の職掌に「城牧」とあるように、基本的に所在国の国司が責任を負うことになっていた。したがって、国司の指揮の下で軍団兵士がその任務に当たっていたと考えられる。大宰府管内でいえば、大野城は筑前国、基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国の軍団兵士が上番して守衛していたことになる。延喜５年（905）『観世音寺資財帳』にみえる「大野城山」の「遠賀門」は、筑前国の遠賀団が守衛した城門として、観世音寺口城門に比定されている（井上信正2015）。

大宰府が筑前国の政務を兼帯していた時期もあり、その時には大野城は大宰府の管理下に置かれ、その守衛は筑前国だけでなく、府下六国（筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後）の軍団兵士によって編成された大宰府常備軍が担っていたと考えられる（松川博一2012）。兵士の任務は、城門や城庫の守衛だけでなく、城堭（城壁や濠）の修繕もあった。日常的な修繕にあたっては、大宰府の大工・少工の指揮監督の下で兵士が使役された。弘仁11年（820）までには、筑前国が別置であっても大野城は大宰府が所管するようになっていた。そして、同14年には大宰府に大野城の管理を担当する主城２人が置かれている（倉住靖彦1990）。

さらに「城司」の存在も確認することができる。「城司」については、主城とそれを勾当（担当）する大宰府の監典等によって一司（部署）を構成したと考えられる（松川博一2018）。その成立は、福岡市早良区の次郎丸高石遺跡出土の「城司」と墨書された８世紀の須恵器の存在から、主城が設置される以前の８世紀まで遡る可能性がある。

(3) 古代山城の役割

大野城に多くの倉庫群があり稲穀が貯えられていたことは、今も残る総柱建物の礎石群や「焼米ヶ原」と通称される尾花地区の炭化米の出土状況からうかがうことができる。文献史料でも大野城の倉庫である「城庫」には、少なくとも「粮米」や「器仗」が納められていたことがわかっている。「粮米」とは９世紀に大野城に配備され城の修理や日常の管理に当たった衛卒の食料米であり、「器仗」とは武器・武具のことである。

「城庫」に収納されている物資は、本来、唐・新羅の侵攻をはじめとした有事に備えた兵粮米や武器・武具だったと考えられる。しかしながら、大宰府史跡出土の木簡のなかには、基肄城の稲穀を筑前・筑後・肥前・肥後に分かち与えることを命じたものがあり、大宰府管内における疫病患者への救済策とみられる。また、鞠智城には非常備置用の倉庫である不動倉があったことが正史に記されている。大野城の「城庫」の稲穀も兵粮のほかに非常時の公粮や財源として収納されていた可能性がある。奈良時代以降、山城が防衛施設としての役割に加えて、備蓄基地としての役割を担うようになったことがわかる（赤司善彦2014・松川博一2018）。

大宰府は、西海道の支配のほか、対外防衛の拠点や外交の窓口という重要な役割を担っていた。それにより対外国および対隼人などの軍事に関わる物資

や外国使節の応接の費用といった、優先すべき臨時的な支出が発生する可能性が他の地域に比べて極めて高かったと考えられる。その万が一の蓄えや備えとして、大野城・基肄城や鞠智城など大宰府管内の古代山城に、有事の際に必要な武器・武具を納める兵庫や、兵粮はもとより非常時の公粮、さらには財源を蓄える不動倉などの倉庫が設けられたとみられる（松川博一2018）。

2 大宰府四天王寺の成立

(1) 建立の目的と背景

宝亀５年（774）、大野城内に四天王寺（四王寺・四王院）が建立され、四天王像が安置された。大野城の築造から110年後のことである。建立の目的は、新羅が日本に害心を抱き常に呪詛していることに対抗して、四天王の法力によって災いを払い除けるためとされている。

当時、日本と新羅との外交関係は、良好ではなかった。藤原仲麻呂の新羅侵攻計画は、恵美押勝の乱での押勝（仲麻呂）の敗死で中止となったが、新羅が引き続き日本との対等外交を強く要求したことから、日本側も新羅使の入京を認めず大宰府から追い返すという強硬な外交姿勢をとっていた。

あわせて、宝亀３年は暴風雨による被害、同４年は日旱による不作と飢饉、同５年は干魃と飢饉に加えて疫病などの災異が続いた。特に疫病の全国的な流行は深刻であった。疫病の多くが九州から全国各地へ蔓延したため、当時の人々は疫病が新羅からもたらされたものと捉えていた可能性がある。日本国内における災厄の頻発は新羅の呪詛によるものとの理解がなされたのかもしれない。新羅への脅威が軍事的なものから観念的なものに変容したことを示す（山村信榮1998、近藤謙2008）。

(2) 四天王像と修法

四天王像造立の思想的な根拠となったのは、金光明最勝王経である。この経典の四天王護国品では、国王が同経を広く弘め読誦すれば、四天王が国土を護り人民も平安であると説いている。大宰府の四天王寺もこの経意に基づいて建立された鎮護国家思想の寺といえる。

大野城内に安置された四天王像は、高さ六尺の塑像と記されている。六尺は約180㎝、塑像は木の骨組みに粘土で肉付けした像のことである。その四天王像が安置された場所は、大野城内の新羅に睨みをきかせることができる「高顕浄地」（高く清らかな地）とされている。大野城内には北西方に毘沙門天、東方に持国天、南方に増長天、南西方に広目天の地名が残ることから、それぞれの峰に尊像が配置されたという考えもある（小田富士雄1977、山村信榮1998）。各峰に修法のための堂舎があった可能性はあるが、『類聚国史』大同２年（807）12月甲寅条には、大宰府からの上申として、大野城の鼓峯に堂宇を建てて四天王像を安置したと述べられており、四王寺山の最高所である鼓峯に四天王像が揃って安置されていたと考えられる。

四天王寺には、４人の僧侶が勤仕し、各人が四天王の像前において、昼は金光明最勝王経四天王護国品を読み、夜は神呪を唱えることになっていた。神呪とは病気の治療や罪業の消滅のために唱える神秘的な呪文で「陀羅尼」ともいう。神呪は新羅の呪詛によって日本に襲いかかる邪悪なものを退散させるという観念的な対抗手段であるとともに、日本に蔓延する疫病を終息させるという現実的な目的も込められていたのかもしれない。僧尼令では、僧尼の重要な役割のひとつとして「呪を持して疾を救う」という医療行為が挙げられている。

四天王寺では、四天王を本尊として供養する四天王法のほか、仏の前で災いの原因と考えられる罪や過ちをひたすら懺悔する悔過法会も行われた。これらの法会や修行は、大宰府の第三等官である監の担当の下で行われ、供養に必要な物品や僧尼の衣服・布施は大宰府の財源により賄われていた。その修法や寺院運営のあり方は、出羽国の秋田城や山陰道などの諸国にひろがりをみせる四天王法や四天王寺のモデルとされた（三上喜孝2004・2005）。

（３）四天王寺と観世音寺

宝亀５年の大宰府には、すでに鎮護国家の寺院として観世音寺や筑前国分寺があった。観世音寺は、天智天皇により九州で亡くなった母斉明天皇の菩提を弔うために発願され、鎮護国家思想の下で大伽藍を誇る大宰府直属の官寺「府の大寺」として整備された。さらに天平宝字５年（761）には、僧侶に戒律を授ける戒壇が置かれ、平城京の東大寺や下野国（栃木県）の薬師寺とともに「天下の三戒壇」に位置づけられた。加えて観世音寺講師も置かれた。

すでに観世音寺や筑前国分寺がありながら、敢えて四天王寺が建立されたのは、新羅との緊張関係や疫病の流行を背景に新羅調伏という明確な目的実現のため、辺境守護にふさわしい好適地、つまり大野城内に仏堂を構えるという強い国家意思に基づくものとみられる。この四天王寺の建立により、観世音寺は、西海道の寺院や僧尼を統轄し、大宰府管内における仏教政策の推進を担う「九国二島の僧統」としての役割に重きが置かれていくことになったと考えられる（松川博一2014）。

3 大宰府四天王寺の展開

(1) 四天王寺の廃止

延暦20年（801）、大野山寺（四天王寺）において行われていた四天王法は停止され、四天王像は山麓の筑前国金光明寺（筑前国分寺）へ移された。その背景には、当時の中央貴族が抱いていた「内外無事」という意識があった。

４年前の延暦16年には大宰府の弩師が停廃され、同18年には大宰府管内以外の烽候（烽火台の物見）の停止が命じられている。さらに同年には、大宰府や大野城内の兵庫に収納している武器・武具を「不動」（非常時以外は封印）とするようにとの命令が伝えられている。この頃、国内外の軍事的な緊張が緩和していたことがうかがえる。

(2) 四天王寺の復置

四天王法は停止されたが、大野山寺として一部の堂舎は維持されたと考えられる。大宰府には大野山寺のほか、最澄が延暦22年に渡唐の安全を祈願して参籠した宝満山の竈門山寺もあった。さらに基肄城跡では「山寺」銘の墨書土器（８世紀）がみつかっており、大野山寺をはじめ大宰府を囲むように山林寺院が存在した可能性がある。

四天王寺が再興されるのは、大同２年（807）12月のことである。筑前国分寺にあった四天王像がふたたび大野城鼓峯の堂舎に戻された。復置の理由は、四天王像を移して以来、疫病が流行したためと述べられる。実際、前年11月の大宰府の報告によれば、毎年、疫病や日旱・水害に見舞われたため、管内諸国の百姓は衰亡し田畑は荒廃したという。疫病の猛威は九州に止まらず、大同２年12月には平安京へ及び、翌年正月には多くの死者を出した。平城天皇は、四天王寺の再置だけではなく、全国に対して大般若経の読誦を命じている。同４年９月には四天王寺での四天王法も復活された。このことからも四天王寺の創建と復置の目的は、仏の力により疫病を退散させることにあったことがわかる。さらに弘仁２年（811）には釈迦如来像も造立・安置されている。

(3) 古代山城と寺社

四天王寺（四王院）とともに大野城や鞠智城の関連記事が多く見られるのは９世紀に入ってからであり、全国的に新羅や疫病への脅威が高まった時期と重なる。これは単なる偶然ではなく、四天王寺（四王院）をはじめとした寺社への祈祷を命じた詔勅や太政官符にみえる「兵疫」の一語や「疾疫」と「兵革」の対句が示すとおり、新羅人などの外国人の来寇と疫病の流行は、対外的な脅威として一体のものとして捉えられていた。したがって城庫に納められた武器・武具や稲穀はその脅威への現実的な備えや蓄えであり、四天王寺をはじめとした大宰府管内の寺社で行われた神仏への祈りはその脅威への観念的な防御策であったと結論付けることができる（松川博一2018）。

それはまさに９世紀に入り大野城や鞠智城において倉庫群の拡張が行われたとする考古学的な成果とも符合する（赤司善彦2014・2016b）。古代山城は９世紀にいたって、ふたたび新羅や疫病への脅威により、物心の両面においてその役割と存在感を高めたと考えられる。

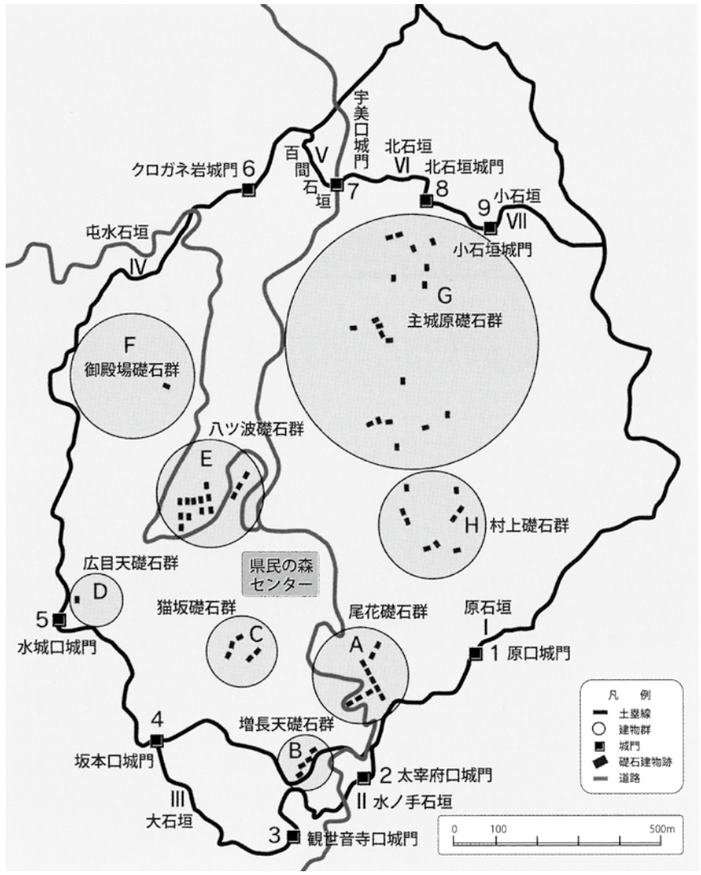
おわりに

大宰府四天王寺（四王院）は、のちに延暦寺第五

代座主（ざす）となる円珍が入唐の前後に滞在したことから天台宗との関わりが深くなる。その一方で、真言宗の影響も強く受けていたことがわかっている。延長８年（930）、醍醐天皇は、四天王を供養する４人の僧の人選に問題があるため、このままでは「兵賊」（外敵）に対して何の神験を示すこともできないとして、天台宗と真言宗の僧から適切な人物を選び任命するように命じた上で、その権限を真言宗の根本道場であり国家鎮護の官寺である東寺に与えている。

４人の僧は大宰府四王寺四禅師と呼ばれ、６年勤めれば国講師（くにこうじ）に任じられるという特典があったため、希望者は任料を東寺に納めて四禅師への補任を求めた。その任料は東寺の重要な収入源となり、中門などの堂舎の修理料に当てられた。東寺による四王寺支配は、少なくとも12世紀まで続いたことがわかっている。

12世紀以降、四王寺山には末法思想の下、経塚が築造される。経塚は、四天王寺の中心堂舎があったとみられる毘沙門堂付近をはじめとして、四天王寺の寺域に多く営まれている（岡寺良2018）。経塚の造営については、これまで大宰府の官人や観世音寺の僧侶の関与が指摘されている（杉山洋1985）。加えて大宰府四王寺の四禅師、特にその内の天台僧が経塚の造営に深く関わっていたことが想定される。大宰府四王寺が経塚文化の開花や伝播に大きな役割を担った可能性が考えられる。



●[城門]
1 原口城門
2 太宰府口城門
3 観世音寺口城門
4 坂本口城門
5 水城口城門
6 クロガネ岩城門
7 宇美口城門
8 北石垣城門
9 小石垣城門

●[石垣]
I 原石垣
II 水ノ手石垣
III 大石垣
IV 屯水石垣
V 百間石垣
VI 北石垣
VII 小石垣

●[礎石群]
A 尾花礎石群
B 増長天礎石群
C 猫坂礎石群
D 広目天礎石群
E 八ツ波礎石群
F 御殿場礎石群
G 主城原礎石群
H 村上礎石群

大野城跡遺構全体図

参考文献

赤司善彦「古代山城の倉庫群の形成について―大野城を中心に―」（『東アジア考古学論攷』２、中国書店、2014年）
赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」（『月刊文化財』631、2016年a）
赤司善彦「鞠智城の建物景観の推移」（『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論文集編集委員会、2016年b）
井上信正「小結」（『大野城跡Ⅰ』太宰府市教育委員会、2015年）
宇美町町誌編さん委員会編『新修　宇美町誌　上巻』（宇美町、2020年）
岡寺良「四王院跡と四王寺山経塚群」（『大宰府の研究』高志書院、2018年）
小田富士雄「筑前・四王寺」（『九州考古学研究　歴史時代篇』学生社、1977年）
九州国立博物館編『特別展　未来への贈りもの―中国泰山石経と浄土教美術』（2007年）
九州国立博物館編『トピック展示　大野城と四王寺』（2008年）
九州歴史資料館編『企画展　聖地四王寺山』（2013）
九州歴史資料館編『特別展　四王寺山の1350年―大野城から祈りの山へ―』（2015年）
九州歴史資料館編『大宰府史跡ガイドブック３　特別史跡　大野城跡』（2015年）
倉住靖彦「大野城司考」（『古代中世史論集』吉川弘文館、1990年）
近藤謙「古代の四天王信仰と境界認識」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』５、2008年）
杉山洋「四王寺型経筒―村上経塚出土遺物の紹介―」（『ＭＵＳＥＵＭ』413、1985年）
長洋一「四王院の成立と変遷」（『太宰府市史　通史編Ⅰ』2005年）
松川博一「大宰府軍制の特質と展開―大宰府常備軍を中心に―」（『九州歴史資料館研究論集』37、2012年）
松川博一「大宰府と寺社」（『都城制研究』８、2014年）
松川博一「律令制下の大宰府と古代山城」（『九州歴史資料館研究論集』43、2018年）
松川博一「大宰府官司制論―被管官司の検討を中心に―」（『大宰府の研究』高志書院、2018年）
三上喜孝「古代の辺要国と四天王法」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』５、2004年）
三上喜孝「「古代の辺要国と四天王法」についての補論」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』６、2005年）
山村信榮「国境における古代山城と仏教（軍事から宗教へ）」（『都府楼』25、1998年）
横田義章「大野城の建物」（『大宰府古文化論叢』下巻、吉川弘文館、1983年）

研究発表2

古代四天王信仰の成立と変容

―八・九世紀の彫刻作例を主題として―

近藤　謙
（こんどう　ゆずる）
元亀岡市文化資料館
学芸員

〈プロフィール〉
佛教大学文学研究科博士課程仏教文化専攻単位取得満期。佛教大学ポスト・ドクター、佛教大学宗教文化ミュージアム学芸員、奈良県文化資源活用課学芸員、佛教大学歴史学部非常勤講師、京都美術工芸大学非常勤講師などを経て2019年4月より前職。専門は仏教美術（彫刻）。主たる論考として「城陽市極楽寺阿弥陀如来立像について－仏師行快と快慶晩年の事績」（『密教図像』22号2003年）、「古代の四天王信仰と境界認識」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5　2008年）「愛宕山勝軍地蔵信仰の形成」（『日本宗教文化史研究』17（1）　2014年）「鳥取・三佛寺の騎馬神像について」、（『日本宗教文化史研究』19（2）2016年）、「京都・宗堅寺如意輪観音像の新出像内銘」（『丹波』24号2022年）などがある。

はじめに

本稿では古代の日本列島における四天王信仰に関して、彫刻作例を主題に検証を加えてみたい。その結果を踏まえ、大宰府四王院の四天王像（以下、四王院像）がどのような姿をしていたのか、試案を提示したいと考えている。このため四天王が重要な儀礼の対象とされ、四王院が創建された奈良時代を中心に考察を進めたい。また四王院に倣い山陰道諸国に四王寺が創建された事実に着目し、９世紀に関しても述べてみたい。

1 四天王信仰の始まり　飛鳥時代

７世紀の四天王は六斎日ごとに、下界の人間の行動を観察・記録して帝釈天に報告する存在とされていた（長岡龍作2009）。現存最古の法隆寺金堂像（**図1**）は邪鬼の背に直立し、鎧の下に大きな袖と裾の長い装束を着用している。両目を吊り上げ眉根を寄せ、口を閉じた厳しい顔立ちは、人間を観察するためと考えられている。中でも広目天像は人間の行動を記録する筆と巻子を所持している（長岡龍作2009）。

また四天王寺像は、聖徳太子が自ら四天王像を刻んで戦勝祈願したとされる故事に由来していた（『日本書紀』）。日本仏教において四天王がその初期から重要な位置を占めていた事を物語る逸話である。天平宝字８年（764）に勃発した藤原仲麻呂の乱に際し、この縁起を踏まえたと考えられる銅造四天王像が造立されている（『西大寺流記資財帳』）。

経典には四天王の顔立ちに関する記述があまり見られない。従ってその表情も大陸・半島の手本に倣ったと推測され、古代の人々が四天王のイメージを作り上げていく上で、重要な役割を果たした事だろう。

2 奈良時代の四天王像と『金光明最勝王経』

８世紀には四天王に新たな役割が加わった。誓約を破った者に罰を与える事、そして国土を守護する事である。

典拠は『金光明最勝王経』（以下『最勝王経』大正蔵16）である。その「四天王護国品」には、国王が同経を信奉すれば四天王が国土を守護すると説かれている。四天王は律令国家において極めて重要な役割を担う事になった。『最勝王経』に基づく鎮護国家の祈りは、国分寺により飛躍的に発展する。国分寺の正式名称は「金光明四天王護国之寺」であり、律令国家の全土が四天王の加護を受ける事を願って建立が命じられた（石上英一2006）。

奈良時代には唐の神将像に倣って力強い四天王像が登場した（**図2**）。袖と裳裾が短くなり、四天王像の古典的スタイルが完成された時代である。

東大寺戒壇院像（**図2**）は、２躯が目を細め、他の２躯は両目を見開き、観察者と懲罰者としての性格が造り分けられている。東大寺大仏殿にも像高11メートルを超える古代最大の四天王像（塑造）が存在した（『七大寺日記』）。人々は下界へ顕現した四天王の存在を実感して圧倒されたのではなかろうか。

ここで一つの事件を紹介しておこう。天平９年（737）、伊勢・八幡などの神祇に「新羅の無礼」が報告された。新羅との緊張は、初期には神祇に対処が委ねられていた。後年その役割は四天王が担う事になる。

3 鑑真来朝と新デザインの受容

天平勝宝６年（754）に鑑真が来朝すると、四天王像にも新様がもたらされた。彼らは仏工（以下、来朝工人）を伴ったらしい。

一つは両腕を交叉させる像である。また唐招提寺講堂には、来朝工人の関与が想定される伝持国天・増長天像（**図3**）が伝わる。手足が短くずんぐりとした体形で、両腕の袖と裳裾は長い。両目は見開かれ、球に近い形状を示す。さらに甲冑の文様が浮き彫りされている。新様式は、大安寺の４躯の神将像（**図4**）に顕著な影響を認めることができる。これらは四王院像にも受容された可能性が想定される。

4 御斎会と四天王

神護景雲２年（768）、『最勝王経』を典拠とした御斎会（大極殿御斎会）が恒例化された。毎年正月、四天王による国土安穏と吉祥天による罪障消滅を祈る法会である。大極殿を仮の仏堂と見立て、本尊は廬舎那仏であり、両脇侍と共に高御座に安置された。高御座が据えられた壇の四隅には四天王像が祀られた（山本崇2004）。この構成は大仏殿と同じである。

大極殿には七日の間、諸仏に祈りを捧げる僧侶達が着座し、天皇と百官達はこれを拝した。その時彼らの眼前には、律令国家を法界（仏の理想世界）と為す廬舎那仏と、国土を守護する四天王の姿が顕在化していた事だろう（石上英一2006・長岡龍作2009）。同じ期間、全国の国分寺でも同様の祈りが捧げられていた。御斎会は国分寺と連動し、列島規模で四天王へ国土の平穏を祈願する古代最大の宗教儀礼だったのであろう。

5 新羅との対立と四王院

律令国家は蕃国としての新羅を必要としたが、一方的な理念は拒絶され達成される事はなかった（石上英一1984）。結果として新羅への猜疑心が募り、呪詛を受けているという恐怖心へと転換される。そして『最勝王経』には「隣国怨敵」を四天王が降伏させると説かれている。宝亀５年（774）、大宰府に対して「四天王寺捻像四躯」を造立し、新羅からの呪詛を攘却せよ、とする官符が下された。四王院の創建である（『類聚三代格』）。国家が呪詛への対抗策として寺院と仏像の造立を命じた最古の事例である。しかも四天王像のみを祀る調伏専用の施設であったらしい。古代の寺院において、天部である四天王のみを祀る事は異例である。先述の銅造四天王像が先例となるだろうが、これも西大寺が整備される過程で支院（四王院）に安置され、西大寺の本尊とは位置づけられていない。この事は認識されていたらしく、弘仁２年（811）、四王院に釈迦仏像が造立された（『日本後紀』・井形進2015）。応急設備と言うべき四王院を一般の寺院として整備すべく、新た

に本尊を造った事を意味していると考えられる。

四王院像は、新羅が望める高く開けた土地に造る事が命じられた。視線は新羅へ向かう事が意識されていただろう（長岡龍作2009）。修法においては視線に邪悪を退ける威力があると信じられている。浄行僧４人に春秋二季、四天王像各々１躯の前で昼は四天王護国品を読ませ、夜は神咒を唱えさせた。浄行僧は戒律を厳守し修行に励む僧である。彼らは神変（奇跡）を起こす事ができると考えられていた（長坂一郎2004）。浄行僧が選ばれたのは、彼らが神験を表す事を期待されたためと推測される。この官符の内容は９世紀に新羅海賊への対抗策として踏襲された（鄭淳一2015）。貞観９年（867）には山陰道諸国に同主旨の布告がなされ、新羅調伏の本尊として仏画四天王像が頒布されている（『日本三代実録』）。

6『陀羅尼集経』と9世紀の四天王像

８世紀末には『陀羅尼集経』（大正蔵18）に拠る新しい四天王像（以下、『陀羅尼集経』様像　**図８**）が現れた。律令国家の脅威に対抗する意図から、儀軌に忠実な姿での造像が意識され始めたためかもしれない。『陀羅尼集経』には四天王個々の持物が記されているが、表情に関する規定は見えない。その内容は以下の通りである。

①持国天
　右手に宝珠を捧げ、左手に刀を持つ
②増長天
　右手に鉾をとり、左手に刀を持つ
③広目天
　右手に赤索をとり、左手に鉾を持つ
④多聞天
　右手に仏塔を捧げ、左手に鉾を持つ

かつて『陀羅尼集経』様像は９世紀に登場すると考えられていた（猪川和子1986）。興福寺東金堂像（**図５**）や承和６年（839）の東寺講堂像（**図６**）が最古とされている。現在は８世紀末には存在していた事が指摘され、厳密な意味で『陀羅尼集経』に忠実な作例は少ないとされている。視覚的なバランスを考慮して、手足の構えが調整されたためらしい。東寺講堂では持国天像の持物が宝珠から三鈷杵に変更され、後世まで手本とされている（瀬山里志1998）。

一方、８世紀末の四天王像には部分的に『陀羅尼集経』の特徴が確認でき、広目天像は筆と巻子を持たなくなった。観察する四天王の終焉である。これらの特徴を備えた現存最古の作例は、延暦10年（791）の興福寺北円堂像（**図７**）である。両腕交差像を含む事から、奈良時代後半の流行を示すと共に４躯とも刮目している。両目を見開く姿は四天王が律令国家の脅威に対し、威嚇する存在へと変貌した事実を象徴する事象と言えよう。この内、増長天像は右手を振り上げ、左手は鉾をとる姿勢を示す。この姿は東金堂の広目天像とほぼ一致する。北円堂像の右手は赤い索を持っていたのだろう。この像は本来『陀羅尼集経』様の広目天像であったと考えられる。『陀羅尼集経』様が広まる以前、新様を一部取り入れた過渡的な組み合わせの四天王像が存在したのだろう。

９世紀に入ると、視線や表情の威圧感は一層増大した。威嚇する四天王としての性格が強まったのだろう。その典型が東寺講堂像である。これほど恐ろしい怒りの表情を浮かべた作品は稀だと言えよう。

９世紀の状況を踏まえ、貞観９年の仏画四天王像に関して検討したい。時期から判断すると、この作品は『陀羅尼集経』様であった事だろう。持国天は三鈷杵を持ち、４躯全てが恐ろしい威嚇の表情を浮かべていたかもしれない。またこの時期、単独の毘沙門天への信仰が浮上する。唐において境界守護の霊験から篤く信仰されていた中央アジア起源の毘沙門天（兜跋毘沙門天）信仰が、日本へも伝えられたものである（高橋早紀子2016）。太宰府市の観世音寺にも、10世紀に入る名品が伝えられている。

結びにかえて　四王院四天王像に関する試論

これまでの検討を踏まえ、四王院像の姿に関して試案を提示してみたい。官符から知り得る情報は２点である。一つは捻像すなわち塑造である事、今一つはその法量が「高六尺（約180センチ）」であるという事だ。塑造は奈良時代に最も広く用いられた技法だった。「高六尺」に関しては、奈良時代の等身に近い四天王像として大きめの部類に入る。その作家に関しては平城京から派遣された可能性が想定できる。四王院は太政官が造立を命じた事例のため、官営工房（造仏所）の工人が関与したと想定する事が自然だろう。その姿は平城京に存在した名品と遜色のない、優れた完成度を備えていたと考えられる。

では同時代の作例を参考に具体的な像容に関して検討してみよう。手がかりは宝亀５年という年代である。工人が平城京から派遣されたとして、その作風は奈良での流行から幾ばくか予想可能である。初めにその特徴を絞り込むと、以下の点が想定される。

①両腕交差像を含む
②手足の短い、頭部が大きな太短い体形
③両目が刮目する
④袖が大きく裳裾が長い

四王院像は以上の特徴を備えていたと推測できる。不明な箇所は『陀羅尼集経』の影響がどの程度考慮されるかである。宝亀５年に最も近い現存作例は、延暦10年の北円堂像が該当する。北円堂像は本来、当時の筆頭官寺であった大安寺に伝来した。造像には優れた工人が動員されたと考えられる。延暦８年（789）には最大の造寺機構・造東大寺司が造東大寺所へと縮小・改組されていた（『続日本紀』）。北円堂像の造立はそれから２年後であり、造東大寺所の工人が担当した可能性を想定しうる。先に北円堂の増長天像は『陀羅尼集経』様の広目天像ではないかと記したが、当時最先端のデザインは官営工房の工人でなければ造像しえないものだろう。北円堂像は大安寺にふさわしい新様式の作品だったと考えてよい。そしてこのデザインは17年前の四王院で一定程度、採用されていたと想定しても大きな違和感はないであろう。

ここまでの情報を整理すると、四王院像に『陀羅尼集経』様が一部取り入れられていた可能性が高まってくる。具体的には広目天像が右手に赤い羂索、左手に鉾を持っていたことだろう。これ以上は想像の域を出ないが、甲冑の文様が浮彫されていたかもしれず、顔立ちは大安寺像の様な球形に近い眼と、頬や顎に柔らかな質感で筋肉の隆起を表していたかもしれない。兜に関しては、少なくとも１躯は着用像が含まれていただろう。

そして最後に、その視線は先にも記した様に、律令国家にとって「呪詛をなす」とされた、新羅の方角を威嚇の意味を込めて望んでいた事だろう。瞳には戒壇院像の様に黒い別材が嵌入され、視線が強調されていた事だろう。そして何よりも、呪詛に対抗するため両目が大きく見開かれていただろう。全身が美しく彩色され、甲冑にはふんだんに金箔が用いられ、四天王護国品の功徳を信じさせるに足る、豪奢な姿を誇っていた事だろう。

結びに変えて、推論を交えながら四王院像の姿に一つの試案を提示してみた。四王院の研究において、四天王像の姿に関する検討は情報の不足もあってほとんどなされていない。拙稿が在りし日の大宰府四王院のイメージを構築するにあたり、四天王像の姿を検討する一助となれば幸いである。

図１　法隆寺金堂四天王像（広目天）
（奈良国立博物館2008年）

広目天像

増長天像

図２　東大寺戒壇院四天王像（東大寺絵葉書2011年）

伝持国天像

伝増長天像

図３　唐招提寺講堂伝持国天像　伝増長天像
（浅井和春『新編名宝日本の美術　唐招提寺』小学館1990年）

持国天像

多聞天像

図４　大安寺持国天像　多聞天像（「四天王像」の内）
（西川新次・岡本茂男・矢沢邑一・米田三郎
『大和の古寺四　新薬師寺・白毫寺・円成寺・大安寺』岩波書店1982年）

図５　興福寺東金堂四天王像
（広目天）
（金子啓明『もっと知りたい興福寺の
仏たち』東京美術2009年）

増長天像

持国天像

図６　東寺講堂四天王像
（関口正之『新編名宝日本の美術　東寺と高野山』小学館1992年）

増長天像

持国天像

図７　興福寺北円堂四天王像
（松島健『新編名宝日本の美術　興福寺』小学館1990年）

持国天像（東方）

増長天像（南方）

広目天像（西方）

多聞天像（北方）

図８　『陀羅尼集経』様四天王像（佐和隆研篇『増補仏像図典』吉川弘文館1990年）

参考文献

長岡龍作『日本の仏像』（中央公論新社　2009年）
石上英一「古代国家と対外関係」（『講座日本歴史（２）古代２』東京大学出版会　1984年）
「コスモロジー―東大寺大仏造立と世界の具現」（『列島の古代史７　信仰と世界観』岩波書店　2006年）
山田美季「西大寺四王堂四天王像と王権守護」（『仏教芸術』346　2016年）
山本　崇「御斎会とその舗設」（『奈良文化財研究所紀要』2004　2004年）
鄭　淳一「貞観年間における弩師配置と新羅問題」（『九世紀の来航新羅人と日本列島』勉誠出版　2015年）
長坂一郎『神仏習合像の研究』（中央公論美術出版2004年）
瀬山里志「陀羅尼集経様四天王像の日本における受容と展開」（『仏教芸術』239　1998年）
なお、観世音寺の四天王像は11世紀の『陀羅尼集経』様像である。
井形　進「聖地四王寺山の歴史」（特別展『四王寺山の1350年―大野城から祈りの山へ―』九州歴史資料館　2015年）
高橋早紀子「新図様の毘沙門天の受容と展開」（『鹿島美術研究年報』33冊別冊　2016年）
〈総論参考〉
猪川和子『日本の美術240四天王像』（至文堂　1986年）
松浦正昭『日本の美術315毘沙門天像』（至文堂　1992年）
三上喜孝「古代日本の境界意識と信仰」（『古代中世の境界意識と文化交流』勉誠出版　2011年）
「光仁・桓武朝の国土意識」（『国立歴史民俗博物館研究報告』134集　2007年）
「古代の辺要国と四天王法」についての補遺」（『山形大学歴史・地理・人文論集』６　2005年）
「古代の辺要国と四天王法」（『山形大学歴史・地理・人文論集』５　2004年）
拙稿「古代の四天王信仰と境界認識」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』５　2008年）

研究発表3

四王院跡と四王寺山経塚群

岡寺　良
（おかでら　りょう）
九州国立博物館
展示課主任研究員

〈プロフィール〉
大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程・九州大学大学院人間環境学府博士後期課程修了（博士（人間環境学）、九州大学）。専門は日本考古学（歴史時代）。
福岡県教育庁文化財保護課、九州歴史資料館学芸員を経て、2021年より現職。関連論文に「四王院跡と四王寺山経塚群」（『大宰府の研究』2018年）のほか、著書に『戦国期北部九州の城郭構造』（吉川弘文館、2020年）、『九州戦国城郭史大名・国衆たちの築城記』（吉川弘文館、2022年）がある。

はじめに

大宰府政庁跡の背後に聳える四王寺山（大城山）には、宝亀５年（774）に四天王４躯が造られた記載を元に、その時期に四王院（四天王寺）が建立されたとみられている。しかしながら、同じ山内にある古代大野城とは異なり、本格的な発掘調査がなされていないこともあって、四王寺山経塚群が知られている他は、四王院の実態についてはあまりよく分かっていない。ただ、古代四王院に関連する遺構や遺物については、断片的ながらも過去にも言及されてきたし、現地調査や再検討によっても、古代四王院に関わる知見を得ることができる。

本発表では、これまで言及されてきた四王院跡及び四王寺山経塚群についての現段階でわかる情報を整理した成果を報告する。

1 四王院跡に関する遺跡の記載

江戸時代初期に著された『筑前国続風土記』の「四王寺趾」の項には、「四王寺山の上に寺跡有。寺の山号圓満山と云。又此山を鼓峯と云。（中略）創立の時代詳ならず。（中略）四王院は僧坊千区有しと云伝たり。古は甚大寺にして、朝廷よりもたうとひ玉ひし寺なりけらし。今猶礎所々に残り、四王院とて絶頂にわずかなる草庵を立置ぬ。井も猶三所に残れり」とあるが、近代に入り島田寅次郎が次のように述べており（島田1926）、それが現在の四王院跡の認識として引き継がれていると言っても過言ではない。概要は次のとおりである。

「四天王の内北方毘沙門天のみ御殿山に残れり、一山の最高頂にて茂林の内に堂宇あり。寺院明細帳に、本尊毘沙門境内八十一坪応永十一年建立とあり。石祠内に其木像二尺八寸あり、往古の像は烏有となり、中世以降の石像一尺八寸ありしを、寛保の頃村民別に今の像を作り石像と共に祭りしと、されど今は石像なし西方数丁を距てて屯水あり。

古記に四天王は此の毘沙門堂の在りし地方に祭りしものの如し、されど山中四ヶ所に各其趾あり、左に其趾を記す。

四王寺山の東方大原山の頂に持国天の趾と称する所あり、凹地あり、昔屯水ありしと云ふ。山の南方に増長天の趾と伝ふる所あり、武具ツケ池又鏡池と称する窪地に水を貯ふ。此附近礎石最多し。（四間に六間位の地積に一間毎に礎石を置く所三ヶ所あり）山の西南に廣目天の井と称するものあり小形にて石を畳めり、直径約二尺深さ六尺常に三四尺の水を貯ふ獨鈷水と呼ぶ。井の北方に礎石あり。或は云ふ。鏡池・獨鈷水・毘沙門屯水は山上三ヶの無垢水なり。四天王開眼の節、導師此三所の霊水を和して四天王の頂に灌ぎ、五眼具足の妙祈を修せしが、其後雰の神水となれりと云ふ」と記す。

また、島田は「今圓満山四王寺（天字を略す又四王院とも云）の跡と称するものは御殿場と云ひ、鼓ヶ峯毘沙門堂の東北に続きて其墟あり。造林の為め其跡を見る能はざるも、土地を均したる場所六ヶ所ありて、総坪三反以上に及ぶべし附近古瓦の出土多く、又此地より四王寺区に行く坂路にも屋敷跡と呼ぶ地あり」とも記している（島田1926）。

以上をまとめると、四王院の内、毘沙門天のみが御殿山（大城山（四王寺山）山頂）に残るが、その周辺が四王院の中心伽藍で、その平坦地が残されている。一方で、山内には毘沙門天を含めた４ヶ所に四天王にまつわる地名が付された場所が伝わり、それぞれには池や井戸の霊水の存在が確認できる、ということが記載されている。この認識が、現状そのまま引き継がれているといってよいだろう。

図１　四王院関連地図（福岡県教委1983掲載図を一部加工）

2 四王院跡に関する検討

(1) 毘沙門地区の現況調査

上記の既往の四王院に関する認識に基づき、筆者は、山頂の毘沙門地区一帯の踏査を行ったところ、島田の記載のとおり数多くの人工的な造成平坦面や礎石群を確認、明らかに古代大野城跡に関わるものではなく、四王院に関連したものと想定されるものが確認された（**図２**）。

Ⅰ－１…現在毘沙門堂がある平坦面

Ⅰ－２～４：Ⅰ－１の東側に取り付く平坦面。Ⅰ－４では昭和58・59年度に発掘調査が行われ、多数の柱穴や土坑、多数の糸切りの土師皿の他、水晶製軸端や巴文軒平瓦、鬼瓦などが出土

Ⅱ－１～６：Ⅰの東側尾根上に平坦面群が階段状に展開

Ⅲ－１～７：北東側の尾根上にも平坦面群が階段状に展開。Ⅲ－５には一辺約10mの基壇状の高まりがあり、礎石が散布する（**図中礎石群Ａ**）。いわゆる「御殿場礎石群」で、ボーリング調査では「（発掘）調査地点北方で、四王寺の一院と考えられる、建物（外陣４間×５間、内陣１間×１間）の礎石をボーリング調査で認めた」とあり、さらに「桁行約9.1m、梁行約8.1m」基壇上には斜格子の瓦が大量に散布（９世紀）（吉村1992）

図２　四王寺毘沙門地区平面図（岡寺2018）

Ⅳ－１～４：Ⅲ－３から東側の尾根上の平坦面群

Ⅴ：約20m四方の平坦面の南西側を中心に礎石列が確認でき、一部には基壇状の高まりと石列も認められる（**図中礎石群Ｂ**）

以上のように、毘沙門地区の四王院に関わる平坦面群は一辺約200mの範囲内に、20面を越える平坦面群を擁し、さらには明確な礎石建物が２棟存在することがわかる。

その他、この地区における注目すべき遺構としては、「毘沙門ノ井」が挙げられる。

⑵ 毘沙門（御殿場）地区からの出土遺物

①発掘調査出土遺物など

ａ．文様セン（**写真１－１**）

ｂ．鬼瓦（**写真１－２**）

ｃ．水晶製軸端（**写真１－３**）

ｄ．巴文軒平瓦・二重斜格子丸瓦（**写真１－４・５**）

ｅ．「四王」銘文字瓦（**写真１－６**）

②銅製独鈷杵（**第３図**）

⑶ その他四王院跡に関連する遺構の検討

毘沙門（御殿場）地区以外にも、山内には広目天、増長天、持国天と呼ばれる三つの地区があり、それぞれ四王院に関連する遺構が認められる。

①広目天地区の井戸（けいさしの井戸）・礎石群

②増長天地区（鏡ヶ池）

③持国天地区（持国天ノ井）

❸ 四王寺山経塚群に関する検討

四王院の中枢が置かれたとみられる毘沙門地区付近では昭和２年（1927）に発見された「毘沙門堂経塚」があり、古い発見ながら、発見当時の状況が詳細に記録されている。

毘沙門堂経塚は、昭和２年に福岡県嘱託職員であった島田寅次郎が地元民と共に大野城跡の土塁確認調査を行っていた際に発見したものである。

発見した時の状況やその経緯については、島田本人が詳細に報告を行っている（島田1927）。

毘沙門堂経塚において発見された経塚はＡ～Ｅの５箇所８基、経筒は11合にも及ぶ。それぞれの経塚の概要については**写真２**のとおりであり、経塚群は毘沙門堂の東側から、南北一列にＥ、Ｄ、Ａ、Ｂの順番で経塚が築かれており、Ａ、Ｂ、Ｄについては塚状のマウンドを形成していたことがわかる（**図４・５**）。現状では詳細な位置を知ることはできないが、およその場所を知ることができる。

これらの経塚及び経筒の構成からあげられる点としては、まず一経塚内の経筒の構成である。Ａ・Ｂ・Ｄ経塚を見ると、銅製経筒と陶製経筒が複数個混在

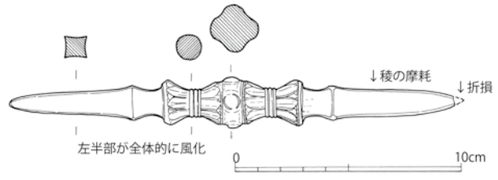


図３　毘沙門（御殿場）地区採集独鈷杵実測図

図４　毘沙門堂経塚発見位置図（島田1927）

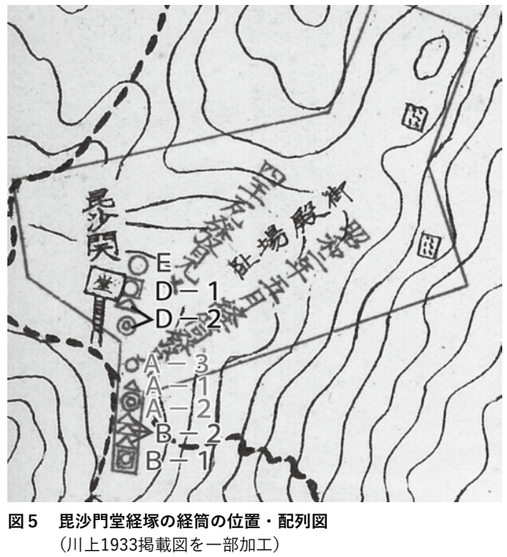


図５　毘沙門堂経塚の経筒の位置・配列図
（川上1933掲載図を一部加工）

しており、特にＡ・Ｄ経塚は、陶製経筒一合、積上式銅製経筒一合、いわゆる「四王寺型」の銅製経筒一合の三合のセットとなっている。これは山内で見つかっている村上経塚の三合の経塚の構成と全く同じであり、意図的な経筒の組み合わせである可能性が高い。また、Ｅ経塚については、毘沙門堂境内の東北隅から見つかっており、滑石製の如来形立像と共伴して一合の大きな四王寺型銅製経筒が出土している。経筒内の木筒には、現在ではもはや読めなくなってしまっているが「…僧朝…則…泰暹」などの墨痕が見られたという（島田1927）。もはや推測となってしまうが、四王院の最も中枢ともいえる場所から出土し、なおかつ滑石製の石仏と共伴する大型の経筒であることから、Ｅ経塚の経筒は、毘沙門堂経塚の中でも中心的な存在であったと考えられるのではなかろうか。

結論

前章まで四王院に関わる遺跡・遺物等について検討してきた。現状の資料のみでは四王院の全貌を明らかにすることは到底困難ではあるが、可能な範囲で指摘を行い結論としたい。

⑴ 四王院の寺院跡について

四王院に関わる場所については、山頂の毘沙門（御殿場・鼓峯）の他、広目天、増長天、持国天の併せて４箇所が山内にはあり、それぞれに関連する遺構が残されている。この内、広目天、増長天、持国天については、井戸跡（もしくは井戸跡と想定される窪み）か、小規模な礎石建物跡があるのみで、大規模な伽藍が建ち並ぶ様子を垣間見ることはできない。おそらく井戸と小規模な仏堂がわずかにあったことが想定される。

その一方で、毘沙門天については、山頂近くに現在の毘沙門堂があり、北東側の斜面にかけて平坦面群が連なり、尾根の先端部には古代大野城とは無関係、つまりは四王院との関連が想定される礎石建物跡２棟が確認できる。特に礎石建物Ａに集中して散布する瓦は９世紀代のものであることからも、これらの遺構群が、四王院の創建期近くまで遡る可能性が考えられる。いずれにしても、毘沙門地区周辺の平坦面群と礎石群こそが四王院の中枢地区であったことが想定されよう。それはこの地区において、独鈷杵や水晶製軸端など、明らかに宗教色の濃い遺物が見つかっていることにも反映しているものと思われる。

⑵ 経塚と中世四王院との関係

毘沙門地区では、12世紀初頭に経塚が築かれている。経塚が築かれた場所は、毘沙門地区の平坦面の西端を画するように規則的に築かれているようであり、また毘沙門地区で行われた発掘調査で出土した中世遺物は、経塚が築かれた時期（経筒の紀年銘から、元永２年（1119）前後）以降の12～13世紀代の遺物がとても多い。これは経塚造営が中世四王院の再隆盛の契機となったことを示しているようにも受け取ることができる。一次史料の記載からは、12世紀以降にはほぼ記載がないことから、四王院

が衰退していった可能性が考えられているが、考古遺物的に見れば決してそのようなことはなく、むしろこの時期に再興され、隆盛した感すらある。東寺百合文書にも、四王寺の四僧（四禅師）に任命を求めるために、銀や唐綾などの様々な品を進上した文書が残されている。中には久安２年（1146）まで下るものもあり、12世紀の半ばに至ってもなお、四王寺の重要性は薄れていなかったことを示す（九州歴史資料館2015）。これらのことから、毘沙門堂経塚の造営を契機として毘沙門地区周辺の堂舎群が、中世寺院として大々的に再整備されたのではなかろうか。

【参考文献】

井形進2016「四王寺山の独鈷杵」『九州歴史資料館研究論集』四一　九州歴史資料館
岡寺　良2018「四王院跡と四王寺山経塚群」『大宰府の研究』高志書院
小田富士雄 1968「古代の太宰府四王院」『九州史研究』（のち小田 1977『九州考古学研究　歴史時代編』学生社に「筑前・四王寺」として再録）
鏡山猛1968『大宰府都城の研究』風間書房
川上市太郎1933「昭和七年発見四王寺経筒写経と四王瓦」『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第八輯
九州歴史資料館1984『九州歴史資料館年報　昭和五十八年度』
九州歴史資料館1985『九州歴史資料館年報　昭和五十九年度』

1　文様セン

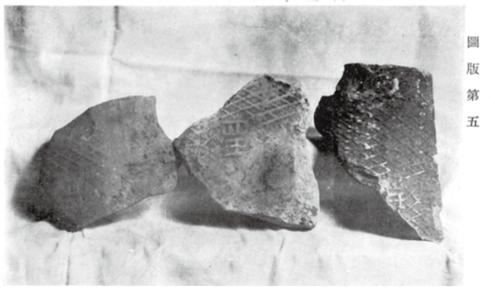
2　鬼瓦

3　軸端

4　丸瓦

5　巴文軒平瓦

6　四王銘瓦

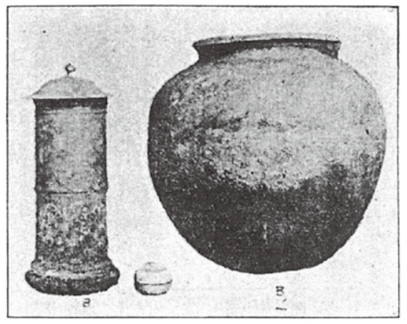


7　報告時の四王銘瓦（川上1933）

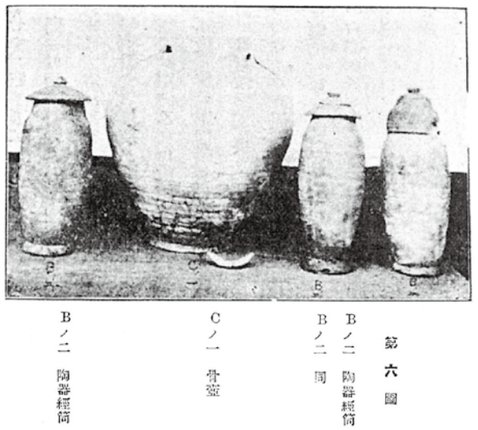
写真１　四王院関連出土遺物（１～５：九州歴史資料館蔵、６：福岡県立筑紫丘高等学校蔵）

九州歴史資料館2015『特別展　四王寺山の一三五〇年―大野城から祈りの山へ―』
四王寺山勉強会2015『太宰府旧蹟全図に描かれた四王寺山』
杉山洋1985「四王寺型経筒―村上経塚出土遺物の紹介―」『ＭＵＳＥＵＭ』№413　東京国立博物館
島田寅次郎1926「大野城址」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第二輯　福岡縣
島田寅次郎1927「四王寺の来歴と遺物の発見」『史蹟名勝天然紀念物』第2集11号　史蹟名勝天然紀念物協会
太宰府市史編集委員会2001『太宰府市史　環境資料編』太宰府市
福岡県教育委員会1983『特別史跡大野城跡Ⅳ』
吉村靖徳1992「四王院」『太宰府市史　考古資料編』太宰府市

A 経塚



B-1 経塚



B-2 経塚，C-1 蔵骨器

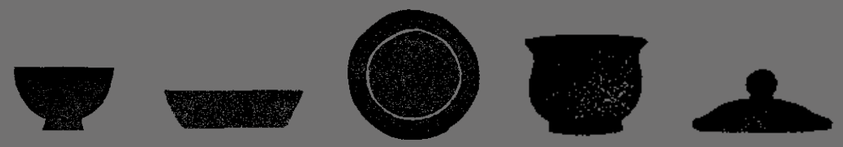
D 経塚

E 経塚

図６　発見当時の毘沙門堂経塚出土遺物（島田1926）

紙上報告

大野城跡・四王院跡出土土器の総量分析



吉田東明・進村真之・宮地聡一郎・小嶋　篤
（九州歴史資料館大宰府調査班）

はじめに

昭和７年７月23日に国指定史跡となった「大野城並びに四王寺跡」（現在「特別史跡 大野城跡」）は、福岡県宇美町・大野城市・太宰府市にまたがる広大な遺跡である。その面積は指定範囲のみでも12,818,291.94㎡におよび、日本最大の山城と言っても過言ではない（**図１**）。加えて、大野城は『日本書紀』に記された日本最古の城郭であるとともに、水城・小水城とも接続することで大宰府都城の北外郭を構成した。また、大野城の特殊性は、城郭としての機能に上書きする形で、四天王寺（以下、四王院）という宗教施設が重複することにある。四王院の存在は、「大宰府牒案」や「四王寺山経塚」等の歴史資料から実在が確認できるものの、その堂宇や存続期間の把握には大きな課題を有する。

本中間報告は、大野城跡・四王院跡出土土器の悉皆調査により、「①大野城と四王院の存続期間」と「②四王院の遺物相」について豊富な資料数に基づいて実証的に明らかにする試みである。

１．対象資料

大野城跡・四王院跡の埋蔵文化財としての取扱いは、福岡県・九州歴史資料館をはじめ関係市町（宇美町、大野城市、太宰府市）が担っており、出土資料の管理は複数機関にまたがる。本報告では、悉皆調査の先駆けとして、まず大野城跡・四王院跡に関連する遺物を豊富に保管し、動態把握が可能な福岡県・九州歴史資料館所蔵品を分析対象とした。対象は、過去の報告書掲載資料だけでなく、未掲載資料も含めて包括的に取り扱った。

２．分析方法

出土資料を全点実見し、種別毎に分類するとともに、時期特定可能な資料や利用痕跡が把握できる資料を抽出した。本分析により、大野城跡・四王院跡の各地点における数量推移が把握できる（**図３・５**）。

(1) 土器の種別

須恵器（坏・埦・蓋・皿・壺・甕・東播系鉢・その他）、土師器（坏・埦・ヘラ切り皿・糸切り皿・

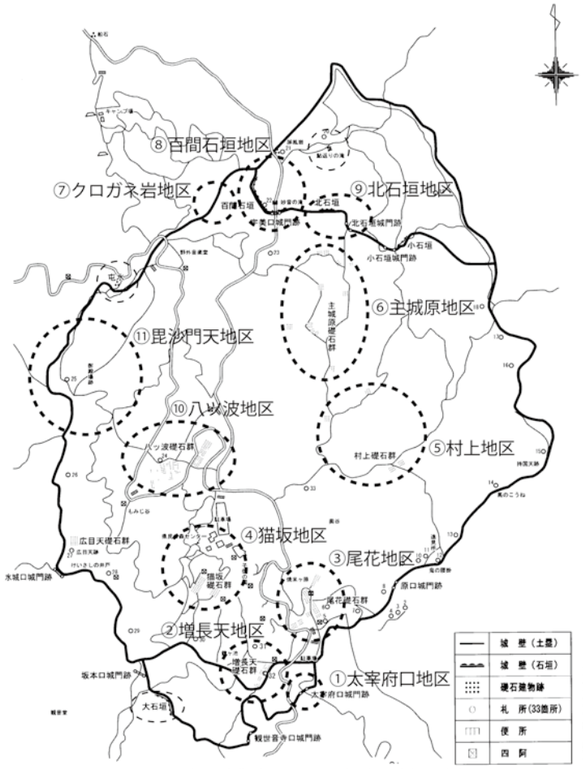


図１　大野城跡・四王院跡の地区割

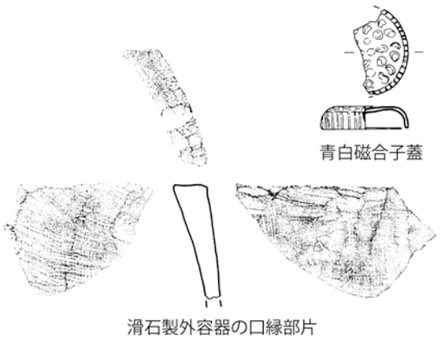


図２　滑石製外容器と青白磁合子（S=1/4）
（九州歴史資料館蔵・田中幸夫コレクション）

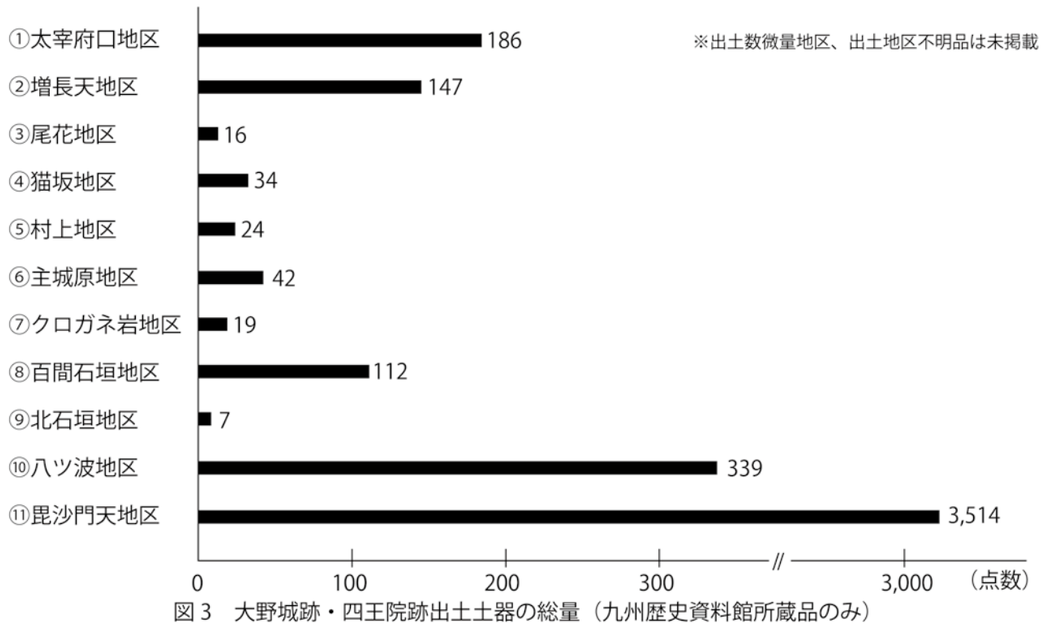


図３　大野城跡・四王院跡出土土器の総量（九州歴史資料館所蔵品のみ）

糸切り小皿・甕・鍋・その他）、黒色土器、瓦器、陶磁器（白磁・青磁・その他）と整理した。

⑵ 土器の時期区分

「大宰府牒案」等の文字史料や経筒等の考古資料から、四王院の運営には観世音寺の関与が確実視できる。そこで、本稿では観世音寺出土土器編年（岡寺2007）を用いることで、観世音寺と四王院、宝満山遺跡群との比較研究にも備えた（**図5**）（小嶋2021）。

3．分析結果

⑴ 九州歴史資料館所蔵「大野城跡・四王院跡出土土器」の総量と出土地点

大野城跡・四王院跡出土土器（九州歴史資料館所蔵品のみ）の抽出総量は、4,440点であった（**図3**）。本点数はいわゆる土器片の点数であり、土器の個体数と直結するわけではなく、同一個体の破片も内包する可能性が高い。しかし、各地点に遺存する土器量、すなわち人為痕跡の濃淡のうち、人為痕跡が濃厚な地点の時間軸把握には有効である。

土器出土数量は、四王寺山の最高所である大城山山頂（標高410m）を内包する「毘沙門天地区」が3,514点と突出して多く、全体の85％以上を占める。古代山城・大野城を構成する倉庫群・城門を主体とする地区では、八ツ波地区（339点）、太宰府口地区（186点）が出土点数の多い地点となる。「館」銘墨書土器・文様塼が出土する等、大野城の管理棟があると目される主城原地区は42点に過ぎない。ただし、主城原地区の調査は限定的であり、現状の出土点数は参考値とすべきである。

⑵ 大野城帰属遺物の様相

四王院建立は宝亀五年（774年）であるため、Ⅱ期（８ｃ初頭～前半）以前の遺物は基本的に大野城帰属遺物と見なしてよい。とくに、大野城築城と関わる遺物としては、主城原地区出土須恵器（Ⅰ期）が注目できる（**図4**）。本須恵器群には、白村江の戦い（663年）前後に用いられた須恵器坏蓋（小田Ⅴ期）が含まれる。また、後続型式の須恵器（小田Ⅴ～Ⅵ期）は主城原地区だけでなく、太宰府口地区や大石垣地区等の大野城各所で見出すことができる。大野城内の最高所（大城山山頂）がある毘沙門天地区は、大野城守衛においても要所となっていたと見られ、出土土器量が多い。

整備期と評価できるⅡ期は、筑紫之役（706～718年）と重なり、遺物量が増加する。整備が一段落したⅢ期の遺物量は、大野城全体で減少する。

⑶ 四王院帰属遺物の様相

四王院の諸施設が大野城城内にどのように配されていたのかは、未解明の課題である。毘沙門天・増長天・広目天・持国天の地名が分散することから、大野城南側（大宰府側）に広域展開した可能性はあるが、出土土器量（3,514点）から見て、毘沙門天地区が四王院の中枢であったことは実証できる（小澤・齋部2010）。四王院での読経・祈祷記事（774～1026年）と連動するように毘沙門天地区出土土器量が増加する。

出土土器は土師器皿を主体としており、供膳具が中心となる。破片数の多い壺・甕片は、貯蔵具と見てよい。土師器甕には炭化物・煤の付着が認められ、調理具も内包する。また、土師器埦・皿には照明具である灯明も含まれている。これら供膳具・貯蔵具・調理具・照明具は、神仏の奉斎に利用されたものも内包すると考えられるが、中世以降の四王院では多くの仏僧が常駐していたと遺物量から把握できる（**図4・5**）。

四王寺山経塚群の造営は、古代四王院と中世四王院の端境期になされており、「高顕浄地」となる四王院寺域内に位置する（岡寺2018）。土器量の推移から見て、四王寺山経塚群造営後のＸ期（13ｃ後～14ｃ中）が中世山林寺院としての最盛期である（**図5**）。経筒墨書銘「荘綱」から見て、中世四王院隆盛の一因に宋商人の経済援助があったと考えられる。

なお、九州歴史資料館と太宰府市による共同企画・令和４年度太宰府歴史トピック展示「九州考古学の黎明と四王寺山」（７月２日～10月４日、太宰府市文化ふれあい館）の準備過程で、田中幸夫コレクション内に毘沙門堂で採取した「滑石製外容器片」と「青白磁合子片」が含まれていることに気が付いた（**図2**）。両資料は四王寺山経塚群を構成する遺物

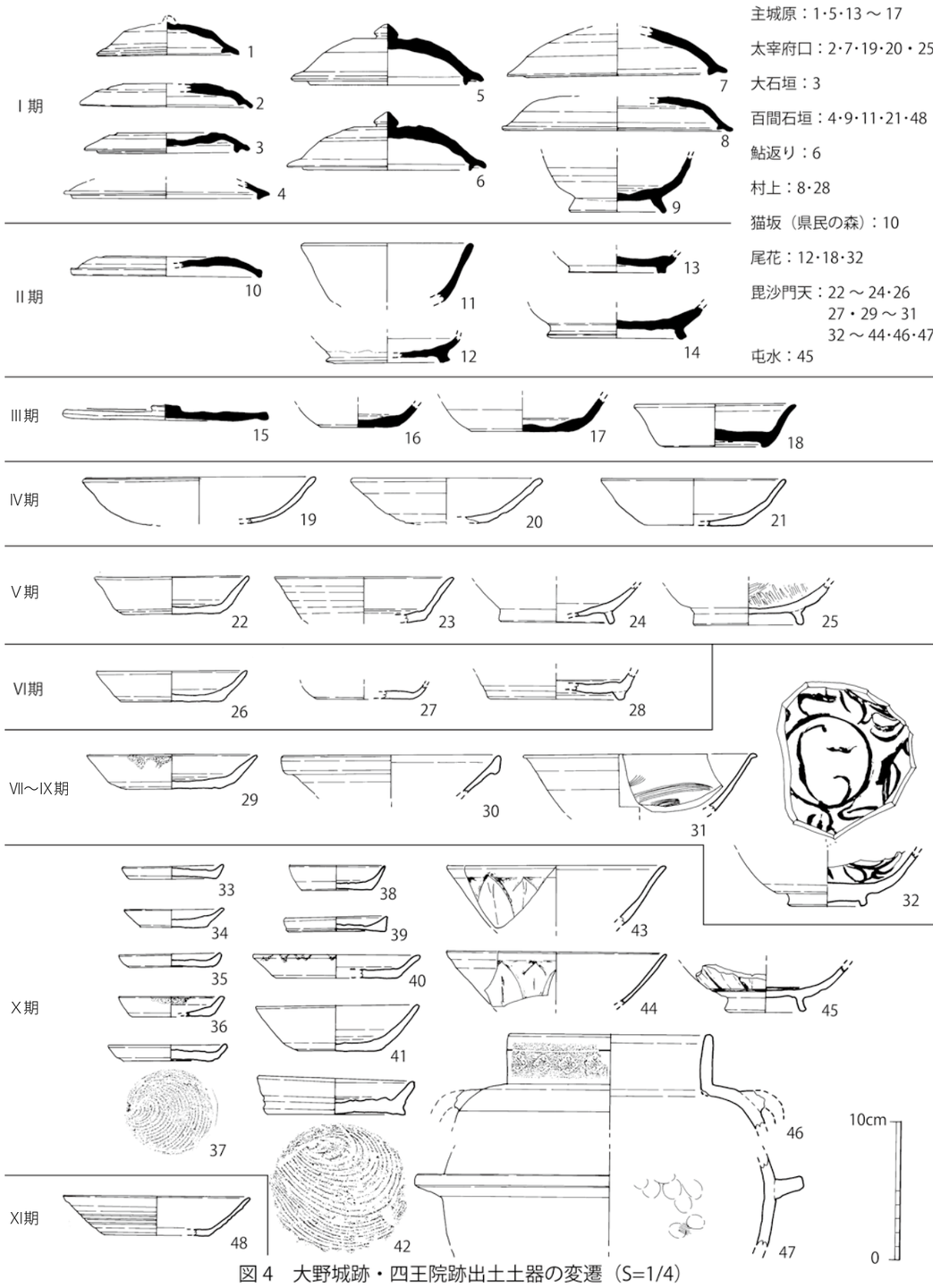


図４　大野城跡・四王院跡出土土器の変遷（S=1/4）

の一部と見られ、同経塚群唯一の滑石製外容器と評価できる。

４．考察

⑴ 大野城と四王院の存続期間

７世紀第３四半期に大野城の築城が開始される。主城原地区出土遺物が型式学的に最古相となることから、外郭と管理棟は同時並行で造営されたと把握できる（**図４**）。

四王院建立がなされた774年以降、とくにⅣ期（８ｃ末）以降は毘沙門天地区と八ツ波地区で土器量の顕著な増加が認められる（**図５**）。両地区は隣接関係にあり、とくに毘沙門天地区出土品は四王院帰属遺物を念頭に置いた方がよい。Ⅲ～Ⅶ期は城庫と四王院が城内に併存するが、Ⅷ期（11ｃ後～ 12ｃ中）以降は、毘沙門天地区（四王院中枢）を除く全地点で土器量が激減する。したがって、Ⅶ期（10ｃ後～ 11ｃ中）が大野城終焉の下限と見込まれる。Ⅵ期（９ｃ末～ 10ｃ中）の遺物相が、大宰府Ⅱ期政庁炎上（941年）による焼土層出土品と共通することもふまえると、大野城の終焉は大宰府官衙の終焉と連動する可能性が高い。なお、文献史料では、延喜五年（905年）の『観世音寺資財帳』における「大野城山」「遠賀門」記載が、大野城最後の記録であり、おおむね整合する。

四王寺山経塚群の造営（Ⅷ～Ⅸ期・11ｃ後～ 13ｃ中）は大野城終焉後の山林でなされたと判断できる。本経塚群を基点に、中世山林寺院としての四王院が最盛期（Ⅹ期・13ｃ後～ 14ｃ中）をむかえる。Ⅺ期（14ｃ後～ 16ｃ）は中世四王院の衰退期と評価でき、戦国期には終焉を迎えたと把握できる。文献史料では天正14年（1586年）の岩屋城落城時の兵火伝承、貝原益軒による『筑前国続風土記』に「四王寺址」として記録され、「今猶礎所々に残り、四王院とて絶頂にわずかなる草庵を立置ぬ。井も猶三所に残れり」と最後の姿が垣間見える（岡寺2018）。

⑵ 四王院の遺物相

四王院建立の774年頃は、竈門山（宝満山）・辛野祭祀遺跡の形成が本格化しており、大宰府周囲の山林各所で寺院や社が営まれていた。大野城跡・四王院跡の毘沙門天地区出土品には、辛野祭祀遺跡出土品に大量に見られる墨書土器や製塩土器がほぼ認められず、遺物組成が大きく異なる。辛野祭祀遺跡は仏教的要素（「寺」墨書土器、鉄鉢形土器等）を複合するが、基軸となる祭式は神祇祭祀（幣帛奉納）となる（小嶋2021）。この点を評価すれば、毘沙門天地区、すなわち四王院出土品は神祇祭祀の要素が少なく、文献史料のとおり仏堂に四天王像を安置し、昼間は金光明最勝王経の読経、夜間は神呪を読誦する仏事と整合的である。

おわりに

大野城跡・四王院跡出土土器の悉皆調査により、大野城と四王院の存続期間について実証的論拠を積み上げることができた。とくに、「①大野城・大宰府官衙の終焉」、「②四王寺山経塚群造営を基点とした中世四王院の隆盛」について成果があった。国家鎮護をなした四王院は、大宰府官衙の廃絶とともに福岡平野周辺の山林寺院として変質・拡大していったのだろう。

悉皆調査は現在も継続中であり、本報告は中間報告であることを改めて言及しておきたい。今後も調査研究を継続し、大野城・四王院の実態解明を図る計画である。

【参考文献】

岡寺良2007「観世音寺域検出遺構の期別設定及び変遷について」『観世音寺―考察編―』九州歴史資料館

岡寺良2018「四王院跡と四王寺山経塚群」『大宰府の研究』高志書院

小澤佳憲・齋部麻矢2010「第Ⅳ章 発掘調査の記録」『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第225集 福岡県教育委員会

小嶋篤2021「宝満山遺跡群と古代祭祀」『宝満山の古代山岳信仰』第11回九州山岳霊場遺跡研究会

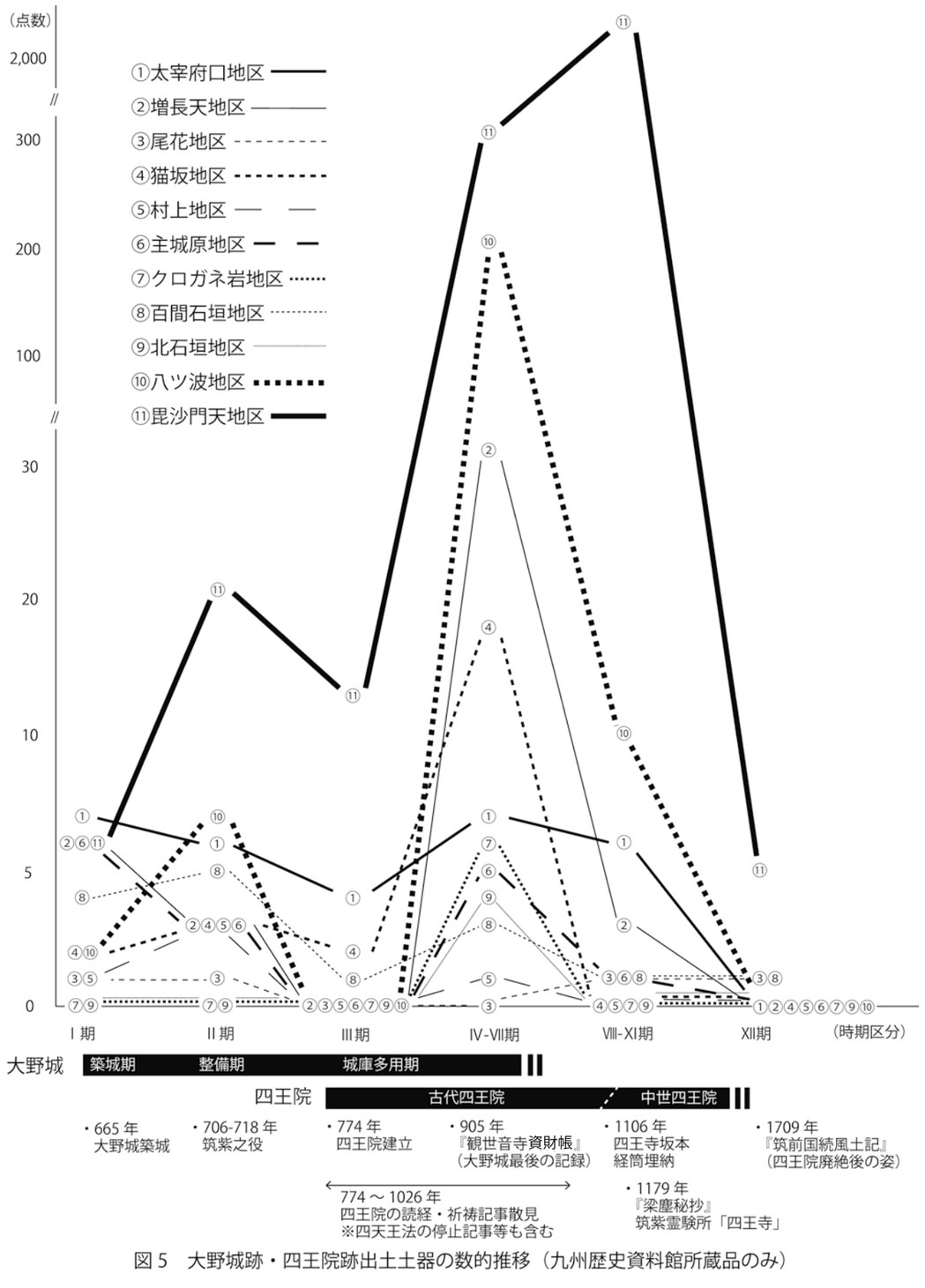


図５　大野城跡・四王院跡出土土器の数的推移（九州歴史資料館所蔵品のみ）

◎「大宰府四王院」関連年表 ◎

天智２年（663）	倭国、白村江の戦いで、唐・新羅連合軍に大敗する
天智４年（665）	大野・椽（基肄）城を築かせる
文武２年（698）	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城の繕治を命じる
文武３年（699）	大宰府に三野・稲積の二城を修治させる
大宝元年（701）	高安城を廃止する
養老３年（719）	備後国の茨城と常城を停止する
天平12年（740）	藤原広嗣の乱が起こる。観世音菩薩の造立と観世音経の書写を全国に命じる
天平18年（746）	観世音寺完成の供養が行われる
宝亀５年（774）	大野城内に四天王寺を建立する
延暦20年（801）	大野山寺の四天王法を停め、四天王像等を筑前国分寺に移す
大同２年（807）	大宰府、疾病が甚だしいため、四王院復置を申請し許可される
大同４年（809）	大宰府に命じて、再び四天王法を大野城鼓峯において行わせる
弘仁２年（811）	大宰府鼓峯四天王寺において釈迦仏像を造る
弘仁11年（820）	大宰府、今後、四王寺悔過を観世音寺講師に行わせる
弘仁14年（823）	大宰府、主厨・主船を停止して、初めて主城二員を置く
天長７年（830）	地震により、秋田城の城郭・官舎および四天王寺の丈六仏像・堂舎がすべて転倒する
承和７年（840）	大宰府、大主城一員を減じて、主厨・主船の各一員を置く
仁寿元年（851）	僧円珍等、入唐のため、城山四王院に寄住する
仁寿２年（852）	肥後国講師某、円珍の帰朝まで城山四王院で二僧に読経させる
仁寿３年（853）	観世音寺・宇佐弥勒寺・四王院・香椎廟・管内国分寺で大般若経を転読させる
天安２年（858）	円珍、鎮西府城山四天王院で『大毘盧遮那成道経心目』（大日経の注釈書）を執筆する
貞観８年（866）	肥後国阿蘇神異変のため、大宰府に命じて、城山四王院で金剛般若経等を転読させる 新羅海賊の来襲を予防するため、能登・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐・長門・大宰府等の国・府に諸神への班幣を行わせる
貞観９年（867）	新羅海賊警戒のため、八幡四天王像を造り、伯耆・出雲・石見・隠岐・長門等に下して、仁祠に安置させる
貞観12年（870）	大野城の器仗を交替に際して検定させることとする
貞観18年（876）	大野城の衛卒の粮米は、旧例により城庫に納めさせる
延長８年（930）	大宰府四王寺の四僧は、東寺がこれを選任することとする
天慶６年（943）	大宰府四王寺、天王像振鳴の怪異を言上する
寛仁３年（1019）	刀伊の入寇に際し、四王寺での御修法を大宰府に命じる
万寿３年（1026）	宇佐八幡宮の怪異により、大宰府四王院で祈祷を行う
康和２年（1100）	東寺、大宰府に牒して覚寿を大宰府四王寺四禅師に重任する
康和４年（1102）	大宰府四王寺天王鉢に黒蛇蟠死の怪異があったことを言上する
嘉祥元年（1106）	僧慶源、経を四王寺山坂本に埋納する（善正寺跡出土経筒銘）
元永元年（1118）	僧教尊、法華経を四王寺山に埋納する（村上経塚出土経筒銘）
元永２年（1119）	僧良実、経を四王寺山に埋納する（毘沙門堂経塚出土経筒銘）
久安２年（1146）	僧隆範・遍厳、四王寺四禅師職の任料を東寺に進納する

九州国立博物館「大宰府学研究」事業・
特別史跡「大野城跡」史跡指定90年記念シンポジウム

大宰府四王院

―「西の都」に築かれた鎮護国家思想の寺―

プログラム

12:30～13:00　開場・受付

13:00～13:10　開会挨拶

13:10～14:00　基調講演
「日本古代の境界意識と四天王信仰」
三上　喜孝（国立歴史民俗博物館教授）

14:00～14:30　研究発表
「筑紫大野城と大宰府四天王寺」
松川　博一（九州歴史資料館）

14:30～14:40　休　　憩

14:40～15:10　研究発表
「古代四天王信仰の成立と変容
―八・九世紀の彫刻作例を主題として―」
近藤　　謙（元亀岡市文化資料館）

15:10～15:40　研究発表
「四王院跡と四王寺山経塚群」
岡寺　　良（九州国立博物館）

15:40～15:50　休　　憩

15:50～16:40　パネルディスカッション

16:40～16:45　閉　　会

九州国立博物館「大宰府学研究」事業
特別史跡「大野城跡」史跡指定90年記念シンポジウム

大宰府四王院

―「西の都」に築かれた鎮護国家思想の寺―

編集・発行　九州国立博物館、福岡県
発 行 日　令和４年（2022）９月３日
印　　刷　西日本新聞プロダクツ